始

323-421
1959

英語小發音學

東京高等師範學校教授

岡倉由三郎著

東京

研究社

MCMXXII

大正
11. 5. 13
内交

初版、大正十一年三月

序　言

自分が他人の前に立つて發音の事を說いたのは今から三十二年の昔、明治二十三年の夏の明治義會の夏期講習會の敎壇の上からであつた。その頃の自分は今の劣な己よりもつと無識で無經驗の二十三歲の一青年であつたのだが、それだけ一生懸命な純眞な氣分は强かつたかも知れない。

その時の主として Georg von Meyer の "*Organs of Speech*" に基いて述べた音韻發生の理法の說明が、その年の暮に「日本語學一斑」の第一卷「總釋の部」として出た自分の初めての著作の一要素を成し二百八頁中の四十頁を占めてゐる。今にして之を顧れば、寔に不完全なものであるに係らず、それが本邦語で書いた最初のやゝ詳しい發音學上の說述として公にされたことは、當時の我國の學界がそんなものに對してすら出版の必要を認める程幼稚なものであつたことを證する好個の資料である。

その以後凡そ十年ばかり經てから此方面の研究の機運が漸く熟して來て、自分の筆に成つた「發音學講話」が出、伊澤修二氏の「視話法」も公になつた。この二書は一般的に發音を論じたものであるが、英語を宗と說いた發音學の書ではマッケロー片山兩氏共著の「英語發音學」拙著の「英語發音學大綱」などが刊行され、最近に岩崎民平氏の「英語發音と綴字」神保格氏の「邦人本位英語の發音」が出た。

發音の物學びは斯くして次第に世人の耳目を惹くやうになり、今日では、英語の敎授に從事する者で發音學の一般の知識を、少くとも公然と無視してかゝる古つはものは曉の星より尙稀になるに

至り、そろそろ Jones 中毒たの發音學狂たのと云ふ新熟語さへ出來かけて一部の人士の眉を曇らせかけて來た程である。

事が玆まで進んで來た時、英語の正しい發音の實修に是非欲しく感ぜられるのは、その正確な口型圖である。それを自分は永い間工夫して去年初めて「英語發音練習カード」二十六葉を研究社から公にした處、時要に投合したものと見えて、之を教塲に採用した中等の學校が意外に多數であつた。それと同時にまた、英語發音學上の簡明な解說を要求する教壇からの聲が次第に高くなつて來た。

この强い要求に應ずる爲、取り出したのは、自分が數年前殆ど書きあけて、机の抽出に藏めておいた本書の稿本で、之を上述のカードに由つて圖解したのが、本書「英語小發音學」である。これに依つて、此物學びが多少なりとも進運に向ひ得るならば、自分は何よりもそれを嬉しく思ふ。

この本の校合その他、極めて難澁な世話カ添へを與へられた甚大の好意に對して、自分は福原麟太郎氏に深い感謝の念を懷く者である。

大正十一年二月二十六日

岡倉由三郎

目次

上編　單音

第一章　父音　PAGE.

§ 1. [p] [b] [m] 1
§ 2. [t] [d] [n] 13
§ 3. [k] [g] [ŋ] 16
§ 4. [f] [v] 20
§ 5. [θ] [ð] 24
§ 6. [s] [z] 30
§ 7. [r] 33
§ 8. [l] 37
§ 9. [ʃ] [ʒ] 40
§ 10. [ç] [j] 43
§ 11. [ʍ] [w] 45
§ 12. [h] 48
§ 13. 總括 49

第二節　母音

§ 14. 序說 52
§ 15. [iː] [iə] [i] 55
§ 16. [ei] [e] 60
§ 17. [ɛə] 65
§ 18. [æ] 67
§ 19. [ɑː] 69
§ 20 [ai] [aiə] [au] [auə] 72

PAGE.
§ 21. [ɔ] [ɔ:] [ɔə] [ɔi] 76
§ 22. [ʌ] 81
§ 23. [ou] [o] 83
§ 24. [u] [u:] [uə] 86
§ 25. [ə] [ə:] 89
§ 26. 總括 92
§ 27. 發音轉寫の注意 94

下 編 連 音

§ 28. 音の同化 96
§ 29. 破裂音の性質 101
§ 30. 破裂音の特殊な性質 102
§ 31. 語尾の s の問題 105
§ 32. 音の長短 106
§ 33. 音幅と音節 108
§ 34. 强勢と强調 109
§ 35. 氣息の段落 113
§ 36. 調子と抑揚 115
§ 37. 參考書 116

附 錄

(一) 本書所用の發音記號の表 1
(二) いはゆる Webster 式符號と本書所用の發音記號との對照表 2
(三) 日本語の發音記號表 6

索 引

挿圖目次

PAGE.
Fig. I 肺から喉頭までの話音の原料を調達する諸機關 4
Fig. II 口腔の縱斷面とうはあご 10
Fig. III [p] [b] [m] の口形 11
Fig. IV [t] [d] [n] の口形 14
Fig. V [k] [g] [ŋ] の口形 21
Fig. VI [f] [v] の口形 24
Fig. VII [θ] [ð] の口形 29
Fig. VIII [s] [z] の口形 32
Fig. IX [r] [ɹ̥] の口形 36
Fig. X [l] [l̥] の口形 39
Fig. XI [ʃ] [ʒ] の口形 42
Fig. XII [ç] [j] の口形 45
Fig. XIII [ʍ] [w] の口形 47
Fig. XIV 父音分類總括圖 50
Fig. XV [i:] [i] の口形 60
Fig. XVI [e] の口形 63
Fig. XVII [ɛə] の入の口形 66
Fig. XVIII [æ] の口形 68
Fig. XIX [ɑ:] の口形 71
Fig. XX [a] の口形 75
Fig. XXI [ɔ] の口形 81
Fig. XXII [ʌ] の口形 82
Fig. XXIII [o] の口形 85
Fig. XXIV [u] の口形 89
Fig. XXV [ə] [ə:] の口形 91
Fig. XXVI 母音配列圖 93

本書では、つとめて、外國語の術語をそのまゝ使用する事を避け、皆邦語に譯して、之を示して置いた。ついては、その原の術語は、索引の部にそれぞれ譯語と對照して出してあるから、之について見られたい。

英語小發音學

上編

單音

第一章 父音

1*

1. Peter Piper picked a peck of pickled pepper,
A peck of pickled pepper Peter Piper picked;
If Peter Piper picked a peck of pickled pepper,
Where is the peck of pickled pepper Peter Piper picked?

此れは、我が國の「向ふの土手を唐人が提燈つけて通る」や「お前のまへ髪い、まへ髪」なごと同じく、發音の遊戯として廣く英國の少年の間に行はれるものである。

2. 此の發音遊戯は言ふまでも無く、其中の p の字の

* この說述上の區分は、後に §1 の如くに讀んで參照する。

示す音が、種々に他の音と組み合つて行くやうに仕組んだものであるが、偖其 p の字の示す音其物は、如何して作られるものであらうか。 試に此唄の中の、p の字が示してゐる一切の音をば、上下の唇を合せずに發音しようとして見ると、其事は到底不可能な事が知れる。それから推して考へると、玆で p の字の示す音は、上下の唇を合せる事を必要の條件として出來る音であるといふ事になる。此の p の字で示してある音は、取扱の便宜の爲 [p] といふ發音記號（普通の p 字と同一形）で之を表はす。[p] 音は主として上下の唇を用ゐて之を作る音であるから、之を(兩)唇音といふ。

【注意】 すべて發音記號には、常の文字と區別する爲に、[ ] を加へる事とする。[ ] を記號の一部分と思つてはならぬ。

3. [p] 音を他の音と聯ねずに、一つ取り離して發音して見ると、其成立に三つの段階が認められる。即ち、

(1) 此音を發せんが爲に、開いた唇をフップと合せる段階。此れを、此音の入(ᵢ)と云ふ。

(2) 斯く唇を合せて、出でんとする息を少しも漏らさず遮り止める段階。此れを此音の中(ᵐ)と云ふ。

(3) 斯く遮斷せる息を唇を開いてプフと開放する段階。此れを其音の出(ᵉ)と出ふ。

4. [p] の如き單音は、談話の際、單獨に用ゐられる事

は、先づ皆無で、通例は他の音と組み合せて使はれるのであるから、其使用せられる位置次第で、

(1) lamp の p の字の示す [p] 音の如くに入の無いもの

(2) apt の p の字の示す [p] 音の如くに出の無いもの、

(3) tempt の p の字の示す [p] 音の如くに入と出と共つながら無いもの。

此の三つが成り立つ。（但し、此中 (3) の場合には、[p] が全然その存在を失つて、今では普通 tempt が temt と發音せられる。）

5. [p] 音が其入又は出または其兩方を存する場合でも、單獨に發音せられない時は、其前後の他の音の性質次第で、其入又は出の形が一々異るのである。此事を理解する爲には、次の五つの場合の [p] 音を互に比較するが宜しい。

(1) apa (2) ipi (3) upu (4) epe (5) opo

6. [p] 音は、普通は (1) p の字一つで表はされるが、時には、(2) pp (3) ph (4) gh (5) pe で書き示されてゐる。例、

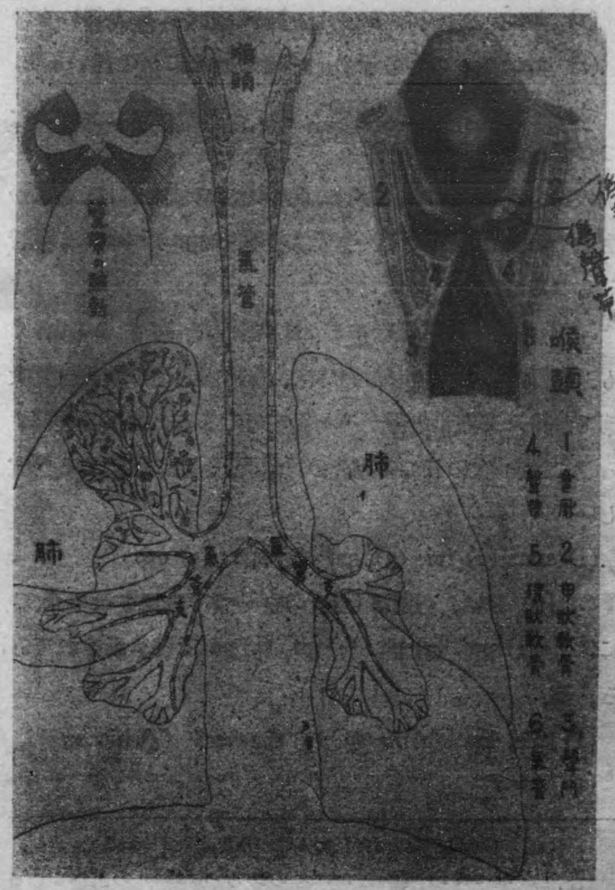
(1) *p*ale, la*p* (2) ha*pp*y (3) she*ph*erd (4) hiccou*gh* (5) ho*pe*.*

* [peil], [læp]; ['hæpi]; ['ʃepəd]; ['hikʌp]; [houp].

（注意） accent の符號は、accent のある syllable の前へつける

露光量違いの為重複撮影

Fig. I 肺から喉頭までの話音の原料を調達する諸機關



7. Boy, bring me a bottle of beer.

此文章の中の b の字で示してある音をば、唇を用ゐずに發音してごらん。上に試みた [p] の場合と同じく、その到底不可能な事が知れる。其故は、此文章の中の b の字で示した音（發音記號は [b] で、普通の b の字と同一形）は [p] 音同樣に（兩）唇音であるからである。

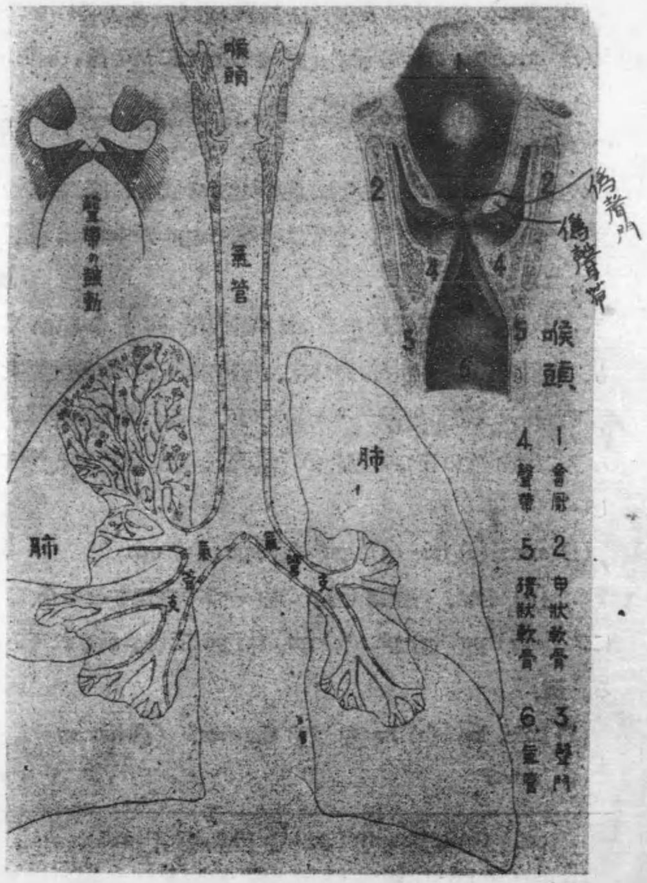
8. [p] 音と [b] 音とは、共に唇音である點は共通であるが、其互に異る主な點は何處にあるのであるか。此點を知る爲には此二つの音の中を交互に發音して見るが宜しい。即ち [p] 音の中は唯の息の斷止で、合せた唇が外に向つて押される感覺の外、何も認められないが、[b] 音の中は、其外に、幽かにウに似た音が聞えるのである。此ウに似た音は俗に喉笛と云ふものゝ中で出來るといふことは、喉笛の外面に輕く指の腹を當てゝ [b] 音の中を發音して見ると、[p] 音の場合には知られない皷動が、指の腹に傳はつて來るのでも知れる。

9. 蓋し、喉笛は學名を喉頭と言つて、肺臟から押し出される息が氣管支を通り、氣管を過ぎて、やがて口外へ送り出されようとして、喉元を越える時に通る一つの關門で、環狀軟骨と甲狀軟骨とを、土臺とし外圍として出來てゐる筋肉製の小さな空室である。

【注意】この節にあげてある諸項については Fig. I 參照。

露光量違いの為重複撮影

Fig. I 肺から喉頭までの話音の原料を調達する諸機關



7. Boy, bring me a bottle of beer.

此文章の中の b の字で示してある音をば、唇を用ゐずに發音してごらん。上に試みた [p] の場合と同じく、その到底不可能な事が知れる。其故は、此文章の中の b の字で示した音（發音記號は [b] で、普通の b の字と同一形）は [p] 音同樣に（兩）唇音であるからである。

8. [p] 音と [b] 音とは、共に唇音である點は共通であるが、其互に異る主な點は何處にあるのであるか。此點を知る爲には此二つの音の中を交互に發音して見るが宜しい。即ち [p] 音の中は唯の息の斷止で、合せた唇が外に向つて押される感覺の外、何も認められないが、[b] 音の中は、其外に、幽かにウに似た音が聞えるのである。此ウに似た音は俗に喉笛と云ふものゝ中で出來るといふことは、喉笛の外面に輕く指の腹を當てゝ [b] 音の中を發音して見ると、[p] 音の場合には知られない皷動が、指の腹に傳はつて來るのでも知れる。

9. 蓋し、喉笛は學名を喉頭と言つて、肺臟から押し出される息が氣管支を通り、氣管を過ぎて、やがて口外へ送り出されようとして、喉元を越える時に通る一つの關門で、環狀軟骨と甲狀軟骨とを、土臺とし外圍として出來てゐる筋肉製の小さな空室である。

【注意】 この節にあげてある諸項については Fig. I 參照。

10. さて、喉笛には其内側に聲帶といふ二枚の肉の扉があつて、其扉が任意に開閉せられる樣に出來てゐる。また聲帶が離合するに付けて出來る中間の通路を聲門と言ふ。Fig. I の右の上の肩には、喉頭の斷面圖が出てゐるが、その 3 は即ち聲門である。聲門の左右に聲帶に相對して上に、乳房のやうに垂れて見えるのは僞聲帶と呼ばるゝもので、從つてその中間の空間は僞聲門といはれる。僞聲帶と眞の聲帶との間に、牛の角の形をして左右に上つてゐる空隙はモルガニー竇といふ袋穴で、この空地がある爲に聲帶は自由に運動する事が出來るのである。1 の示す會厭(あんえ)は飲食物が氣管へ迷ひ込まぬ爲の、開閉自在の蓋である。

11. 聲門の肉の扉である聲帶は普通の門扉の樣に開閉するのでは無く、扇子の二本の親骨が其扇眼(おうぎ)を中心として展開皺閉する樣に開いたり閉ぢたりするのである。其離合と其位置とを想像する爲には、一本の扇子を其親骨を左右の手の指で摘んで、扇眼を外に向けて、喉笛の前面に水平に保ち、之を左右同時に全扇面の約半分ほど開閉して見るが宜しい。

12. 聲門の開閉の樣は種々あるが、之を大別すると、

(1) 聲門の固く鎖された場合、從つて氣息はちつとも此出入しない場合。例へば咳をする前のやうなをりで

この時には一旦聲門が固く鎖されるが、咳とは即ち其閉鎖が内から急に出る息で押し破られる時の音である。

(2) 聲門が輕く鎖されてゐる時、内から寬やかに出て來る息の爲、其肉の扉即ち聲帶があふられ互に相觸れて皷動する場合。斯く聲帶の震動を受けた氣息をこゑといふ。

(3) 聲門が中啓といふ扇(親骨の上半を外面へ反らしたもの)の樣に、其前の半分を鎖し、其後ろの半分のみを寄せ合せた場合。俗にいふ耳語(ささや)の音は斯くの如き半開の聲門を通つて送り出される息に由つて成るのである。

(4) 聲門が、殆ど半開の扇子の如く開いて、其中間を息が自由に通り拔ける場合。普通の呼吸の際の聲門は此狀態にあるので、其時は息が其儘、喉笛の關門を通過して、何の變化をも受けないから、其場合の氣息をこゑに對していきと云ふ。

【注意】 聲帶の皷動については、Fig. I 左上肩の圖參照。

13. さて問題の [p] と [b] との差異の主な點は、發音の際、一つはいき、他にはこゑが用ゐられるのにある。だから [b] を發音すると、聲帶が振動する爲、既に述べたやうに喉笛に指をあてゝゐると、輕く皷動が聞えるのである。こゑを用ゐて作る音をば、普通に濁音と言ひ、いきを用ゐて作る音を、之に對して清音といふ。

【注意】[1] 本邦では、パ、ピ、プ、ペ、ポの骨子の音即ち [p] 音を

は半濁音と稱へてゐるが、これは昔我が國にあつた [p] 音が一旦中絶して後に再び用ゐられる樣になつた所から起つた、誤つた命名で、バ行の基音は純然たる一つの清音である。

【注意】[2] 清音は又無聲音、濁音は又有聲音とも呼はれる。

14. [b] を單獨に發音する時には、[p] (または之と類似の他の單音の場合) と同じく入、中、出の三段階が認められる。其三段階の中、他の音との組み合せの都合で、

(1) 入の無いもの。例、combat の b の字の示す [b] 音の如き。

(2) 出の無いもの。例、subject の b の字の示す [b] 音の如き。

の二種が出來る。

【注意】m 音の後 [b] 音は普通には其存在を失つて lamb, cōmb に於けるが如く、消失してしまふものであるが、稀には succumb の場合の如くに [b] を生かしても發音する人が全くないでもない。

15. [b] 音は普通には (1) b の字一つで表はされるが、時には (2) bb (3) pb (4) be で書き示されてゐる。例、

(1) *b*ed, tu*b* (2) ro*bb*er (3) cu*pb*oard (4) ro*be**

16. Mary and May met at the mill.

此文章の中の m の字で示してある音を、唇を用ゐずして

* [bed], [tʌb]; ['rəbə]; ['kʌbəd]; [roub].

發音して見ると、其不可能な事が知れる。故にこの m の字で示してある音(發音記號は [m] で普通の m の字と同一形)は [p] や [b] と同じく、やはり一つの(兩)唇音であることは明かである。

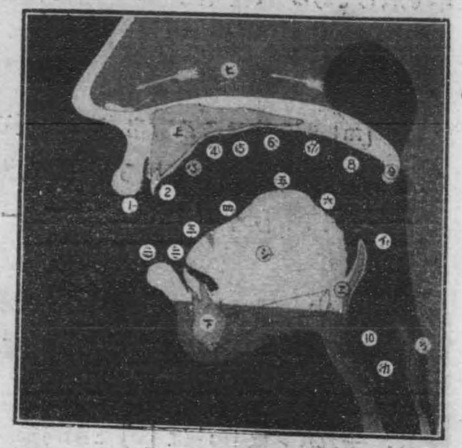
17. [m] 音の中はこゑで出來てゐる事は、此音を出しながら、喉笛を指で押へて見ると、指の腹に傳はる皷動でも知れる。即ち [m] は、[b] と同じく一つの濁音なのである。

【注意】もし [m] をいきで出すと smile の [m] の入の音が出來る。これは發音符號では [m̥] で表はしてゐる。m の下部の ̥ は開放の聲門を示す。

18. それならば [m] は [b] と如何なる點に於て異つてゐるのであるか。[b] 音は唇を合せたまゝ之を出さうとすれば、[p] と同じく、體內から流れ出る氣息が口內で往きづまつてしまふのであるが、[m] 音は之に反して、氣息が鼻から送り出され、こゑが鼻腔に響いて出來る音で、之を長く引延べ得られるのである。換言すれば、[b] は [p] と同じく、一つの破裂音で [m] は連續音であるのである。

19. 更にまた [b] 音と [m] 音との作らるゝ時の氣息の通路を調べて見ると、[b] 音の場合には、[p] 音の時と同樣に、氣管から例の咽頭 (口を大きく開いて鏡で見ると軟口蓋の末端懸壅垂(のどちんこ)の背ろに見える、突きあたりの

Fig. II 口腔の縦斷面とうはあご



1 上唇
2 門齒
3 はぐき
4 前硬口蓋
5 中硬口蓋
6 後硬口蓋
7 前軟口蓋
8 後軟口蓋
9 懸壅垂
10 聲門
一 下唇
二 舌端
三 前面
四 中面
五 後面
六 盲孔部

ヒ 鼻腔
イ 咽頭
シ 舌
エ 會厭
ナ 食道
腔骨 喉頭
骨頭
顎 喉
上顎
下顎
ヒ 上下カ

尖 尖唇
唇 唇齒
齒 齒はぐき
齒 齒蓋
齒 齒蓋
齒 齒蓋
き 齒蓋
蓋 齒蓋
蓋 齒蓋
蓋 齒蓋
蓋 齒蓋
垂 垂腺
腺 垂腺

り
の
き 口
臼 口
臼 口
ぐ 口
口 口
口 口
口

肉の壁の處）へと昇つて行く氣息が、（鼻へ出る通路が、懸壅垂で、閉塞してあるので）口腔から、唇の關門を突破して、體外へ出るのであるし、[m] 音の場合には、唇の關門が固く鎖されてゐて、軟口蓋が低く垂れて、鼻腔へ出る通路が開放してあるのを幸に、氣息が鼻から體外へ逸出するのである。之を要するに [b] は [p] と同じく、一つの口(腔)音であり [m] は一つの鼻(腔)音である。

【注意】[1] 咽頭、懸壅垂、軟口蓋等に就いては Fig. II 參照。

【注意】[2] 鼻腔には格別、氣息を阻止する設備がないから、發音上の鼻腔の效用は聲の反響の室たるに止まる。從つて鼻(腔)音は常に連續音である。

【注意】[3] 鼻音を出す時のほか、鼻腔への通路は閉鎖されてゐるのが、日本語と英語の常である。

20. 以上に論じて來た [p] [b] [m] の三音に就いて、其相互の性質の異同を、表に作つて示して見ると、次の如くに成る。

- (兩)唇音
  - 口(腔)音＝破裂音……
    - 清音 [p]
    - 濁音 [b]
  - 鼻(腔)音＝連續音……
    - 清音 [m̥]
    - 濁音 [m]

21. [m] 音は普通には (1) m の字で書き表はされるのであるが、時には (2) mm (3) gm (4) lm (5) mn (6) mb

(7) md (8) me とも書かれてゐる。例、

(1) *m*an, su*m* (2) su*mm*er (3) phle*gm* (4) ca*lm*
(5) autu*mn* (6) la*mb* (7) Ham*pd*en (8) ho*me*.*

【注意】[p] [b] [m] の口形については、Fig. III 參照。

2

22. Twinkle, twinkle, little star!
How I wonder what you are!

此二行の中の t の字で示してある音を調べてごらん。此の音は一つの斷音であるが、之を發するには、唇を合せる必要が無いのみならず、唇を合せては、此音は成り立たないから、此音は唇音ではない。此音の發せられる爲には、舌の前端が、上齒の裏の齦(はぐき)に當てられ、氣管から送り出される氣息が、此處に一旦喰ひとめられるのである。それ故此音を舌端(上齦)音と呼ぶ。此音に對する發音記號は、[t] (普通の t と同一形) である。

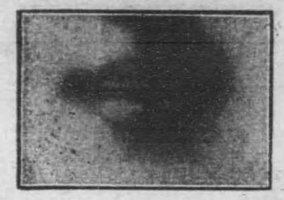
23. [t] を發する際には聲帶の皷動が無いから、此音は清音である。[t] をいきでなくこゑで出すと、其濁音、即

Desperate diseases must have desperate cures.

* [mæn], [sʌm]; ['sʌmə]; [flem]; [kɑ:m]; ['ɔ:təm]; [læm] ['hæmdən]; [houm].

Fig. IV [t] [d] [n] の口形

[t] [d] [n] の口形外貌



[t] [d] の口形縱斷面

[n] の口形縱斷面

の中の d の字で示してある音(發音記號は [d] で、普通の d と同一形)が出來る。

24. [t] も [d] も共に口音で、之を發音する際には、息が鼻腔からは更に漏れぬ。然るに聲帶の皷動を受けた氣息が、舌端の爲に、上顎の裏で喰ひ止められる樣は全く [d] の場合と同じであり乍ら、其氣息が、鼻腔から、[m] 同樣の手續で開放せられると、玆に

No gains without pains.

の中の n の字で表はしてある音(發音記號は [n] で、普通の n と同一形) が成り立つ。

【注意】 [n̥] をいきで出すと snow や snail の n の入の音となる。之を [n̥] で表はすことは [m̥] 同樣である。

25. [t] [d] [n] の三音を、表の形に示すと、

舌端(上齦)音
- 口(腔)音＝破裂音
  - 清音……[t]
  - 濁音……[d]
- 鼻(腔)音＝連續音
  - 清音……[n̥]
  - 濁音……[n]

26. [t] 音は、普通には (1) t の字一つで示されるが、時には (2) tt (3) th (4) bt (5) ct (6) te とも書かれてゐる。例、

(1) *t*ea, ea*t* (2) mi*tt*(en) (3) *Th*ames (4) dou*bt*
(5) indi*ct* (6) lat*e*.*

* [tiː], [iːt]; ['mit(ən)]; [temz]; [daut]; [in'dait]; [leit].

27. [d] 音は、(1) d の字一つで書かれるのが普通であるが、時には (2) dd (3) ld (4) de でも示されてゐる。例、

(1) *d*eep, wee*d* (2) a*dd* (3) cou*ld* (4) ma*de*.*

28. [n] 音は普通は、(1) n の字一つで示され、時には (2) nn (3) dne (4) gn (5) kn (6) ln (7) mn (8) pn (9) ne でも示される。

(1) *n*ut, pi*n* (2) pe*nn*y (3) We*dne*sday (4) si*gn* (5) *kn*ife (6) Linco*ln* (7) *mn*emonics (8) *pn*eumatic (9) ma*ne*.†

【注意】 Fig. IV は [t] [d] [n] の口型を示す。[p] [b] や [m] と違つて [t] [d] や [n] はその他の大概の音と同じく、外部から關係の諸音機の動靜を窺ふことは、困難である。しかし [t] [d] の如き音の場合ならば、音を造りながら、舌の局部を、その當てられる顎の部分に擦つて見ることは音の出來かたを確知するに都合がよい。

3

29. Death keeps no calendar.

All that glitters is not gold.

* [di:p], [wi:d]; [æd]; [kud]; [meid].

† [nʌt], [pin]; ['penɪ]; ['wenzdi]; [sain]; [naif]; ['linkən] [ni'mɔniks]; [nju:'mætik]; [mein].

Kalinda
Kalena

此二つの諺の中の k の字又は c の字で示してある音と g の字で示してある音とを發音しながら、其出來方を [p] [b] 及び [t] [d] に比べて見ると、此音は唇音でも舌端音でもなく、一つの破裂音である事が知れる。

30. 今指を口中に入れて、上顎を奥へ奥へと摩でゝ進むと、天蓋の樣な形をしてゐる其全體の中、前の半分は骨で出來てゐて硬いが、後ろの半分は肉で出來てゐて柔軟である事が感知せられる。其中、前半を學名では硬口蓋と言ひ、後半をば軟口蓋といふ。その硬軟兩口蓋に又前中後の區別が出來て、前硬口蓋、中硬口蓋、後硬口蓋、及び前軟口蓋、後軟口蓋、の五種が生ずる事は、Fig. II で見てほしい。

31. また吾々の舌を口の外へ成るべく長く出して、之を鏡に寫して見ると、舌の表面の中、尖端から約四分の處は平らである。此部分を便宜上、前舌面と名づける。前舌面の後ろの方約五分ばかりの處は多少凹形を成して見える。此部分が中舌面である。中舌面に隣接する奥の方は舌が著しく隆起してゐる。此部分を名づけて後舌面と云ふ。後舌面のもつと後は、普通盲孔部と呼んで居て、舌端と相對する舌の最後部の名前である。皆、Fig. II に示してある。

32. 後舌面を前軟口蓋、即ち、硬口蓋に隣つてゐる部分

にあけて、口腔から流れ出ようとする氣息を塞ぎ止め、之と同時に鼻腔からも氣息が漏れないやうに、懸壅垂で咽頭の上部を塞ぐと、逸出の氣息がこゝに全く斷止せられる。此斷止をいきで突破すれば、keeps の k の字又は calendar の c の字で表はしてある音(發音記號は [k] で普通の k の字と同一形)が出來、また之をこゑで突破すれば、glitters や gold の g の字で表してある音(發音記號は [g] で普通の g の草體と同じ形であるが、give の g の如き所謂 hard g にのみ用ゐて gem の g の如き所謂 soft g には決して之を用ゐぬのである)が出來る。

33. [k] 音は、普通は、(1) k 又は c 若しくは ck であるが、時には、(2) cc (3) ch (4) cq (5) gh (6) lk (7) x (8) ke (9) che でも表はされる。例、

(1) *k*ing, *c*ant, ba*ck* (2) a*cc*ount (3) monar*ch*
(4) a*cq*uaintance (5) hou*gh* (6) ta*lk* (7) e*x*ception
(8) ma*ke* (9) a*che*.*

34. [g] 音は普通は (1) g で表はすが、時には (2) gg (3) gh (4) gu でも表はされる。例、

(1) *g*ood, le*g* (2) e*gg* (3) *gh*ost (4) *gu*est.†

* [kiŋ], [kænt], [bæk]; [ə'kaunt]; ['mɔnək] [ə'kwəintəns]; [hɔk]; [tɔːk]; [ik'sepʃən]; [meik]; [eik].

† [gud], [leg]; [eg]; [goust]; [gest].

35. Now let us sing long live the King.

此文の中の sing と long と King との ng で示されて居る音を調べて見ると、此音は、舌の當り處から言ふと、[k] や [g] と同じでありながら、此れらの二音と違つて、其作られる際に、氣息が鼻孔から體外へ送られるのであつて、[m] [n] と同じく一つの鼻音である事が知れる。此音に對する發音記號は [ŋ] である。此記號は n の字の右脚を引き伸べて、n と g との合體せる如くに造つたものである。

36. [ŋ] 音を示す爲の普通の文字は (1) (音節の末尾に於ては) 合字 ng 又は (2) (同一語中の [k] 音又は [g] 音の前に於ては) n* 一字であるが、時には (3) nd (4) ngue (5) ngh が用ゐられる事もある。例、

(1) ri*ng*, wi*ng* (2) i*nk*, si*ng*le (3) ha*nd*kerchief
(4) to*ngue* (5) Birmi*ngh*am.†

【注意】[ŋ] をいきで作ると [n̥] となる。length の g の出の音はそれである。

37. [k], [g], [ŋ] の三音を其相互の性質の異同に基いて、表の形に示すと、次の通りに成る。

* 例外:—(1) 複合詞及び (2) 接頭語 en 又は in- を含める語。即ち (1) mankind, vanguard (2) engrave, income では n は [ŋ] にならぬ。

† [riŋ], [wiŋ]; [iŋk], [siŋgl]; ['hæŋkətʃif]; [tʌŋ]; ['bəːmiŋəm].

舌背(軟口蓋)音 { 口(腔)音＝破裂音 { 清音……[k]
濁音……[g]
鼻(腔)音＝連續音 { 清音……[ŋ̥]
濁音……[ŋ]

[k], [g], [ŋ] の口形については Fig. V 參照。

38. 以上に調べた六個の口音、即ち [p] [b], [t] [d], [k] [g], の三組は何れも破裂音で、此三組の口音と併せて擧げた [m] [n] [ŋ] の三音は、之に反して、皆連續音であるが、共に鼻音で、口音ではない。依つて以下には口音にして而も連續音であるものを論じよう。

39. [p] [t] [k], [b] [d] [g] の如き破裂音はいきで出來るものも亦こゑで出來るものも其中から出に移る際に一種の些細な破裂の音響を伴ふから破裂音と言ふのであるが、[m] [n] [ŋ] の連續音を發音する時には、破裂の音響が之に伴ふことなく、唯聲帶の皷動を受けた氣息即ちこゑが鼻腔に於て反響の音を生ずるに止まる。鼻音は畢竟一つの共鳴音に過ぎないのである。

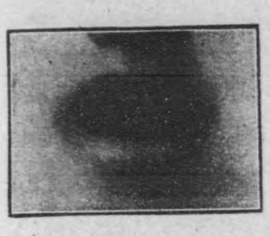
4

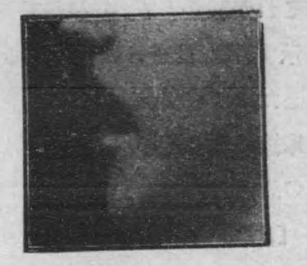
40. Forced fruits fail in flavour.

此文の中の f の字で示してある音は、如何にして作られるか。物に塵が付いてゐる時、吾々は之を吹いて拂ふ

Fig. V [k] [g] [ŋ] の口形

[k] [g] [ŋ] の口形外貌





[k] [g] の口形縱斷面

[ŋ] の口形縱斷面

塲合には、上下の唇を窄めて其間から息を急に强く送り出す。此塲合に息が唇に擦れて、一つの摩擦の音が出る。これが我が「フ」の基音である。上の英文の中の f の字の示す音は、此音と同じであるか。否、兩者は似てはゐるが、また大に差異がある。「フ」の基音は、兩唇の間に出來る摩擦の音であるが、假令へば fail の f の字の示す音は上の前齒と下の唇との間に出來る摩擦の音であるのである。

【注意】我が國語中の「フ」の基音は正式には上述の如くに造られるのであるが、その略體(ドイツ語の ach やスコツトランド語の loch などの ch の連字が示す音と同質でそれより輕微なもの)が日常使はれてゐる。舌の背を高く軟口蓋に近よせて、その間にいきを軋ませて之を造る。

41. 上記の Forced fruits 云々の文の中の f の字の示す音を、發音記號 [f] (普通の f と同一形) で表はす。[f] 音をこゑで發音すると

Fools think themselves wise to the very last.

の中の v の字で示してある音(發音記號は [v] で普通の v と同一形) が出來る。

42. [f] 音と [v] 音とは之を發する際、氣息の續く限り、何時までも之を長く引き延べる事が出事るから、一つの連續音であるが、之を發音してゐながら、試みに鼻を摘んで、鼻からの通路を遮斷しても、[m] [n] [ŋ] の三音に於て認める樣な音の中絶を來すことなく、また其他にも音響の上に何の變化も起つて來ないから、[f] 音と [v] 音とは共に、純粹の口音である事が知れる。

43. [f] 音と [v] 音とは [m] [n] [ŋ] 音と同じく連續音ではあるが、之と違つて共鳴音ではなく、一つの擦れて出る音、即ち摩擦音である事を記憶すべきである。

44. 以上の諸點から [f] 音と [v] 音の性質を表にして示して見ると、次の通りに成る。

(上)齒(下)唇音＝摩擦音 { 清音……[f] / 濁音……[v] }

45. [f] 音は普通には (1) f の字一つで表はすが時には (2) ff (3) ph (4) gh (5) ft (6) pph (7) fe でも表はす。例、

(1) *f*irst, i*f* (2) o*ff* (3) photogra*ph* (4) rou*gh*
(5) o*ft*en (6) sa*pph*ire (7) wi*fe*.*

46. [v] 音は普通には (1) v の字一つで表はすが、時には (2) f (3) ph (4) ve でも表はす。例、

(1) *v*illage (2) o*f* (3) ne*ph*ew (4) sto*ve*.†

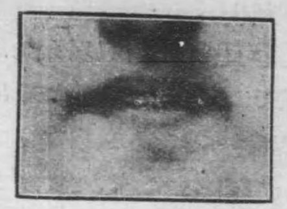
【注意】[f] [v] 音の口形については Fig. VI 參照。

---

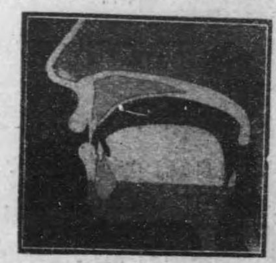
* [fə:st], [if]; [ɔf]; ['fɔtəgrəf]; [rʌf]; ['ɔfən]; ['sæfaiə]; [waif].
† ['vilidʒ]; [ɔv]; ['nəvju:]; [stouv].

Fig. VI [f][v] の口形

口形外貌



口形縱斷面



5

47. Theodore Throstle threw a thimble into a thicket of thistles.

此れは我が「かごのかんぶつやのかちぐりやかたくてかめない」の如き一つの發音遊戯である。此文の中の th

で示してある音を調べて見ると、共に口音であつて響の工合も大に [f] 音に似通つてはゐるが、其作られる樣は全く別である。即ち此音は上齒と下唇とで出來るのではあるけれども、假令へば threw の th の音は上の前齒の端の裏手へ、輕く舌の前端を當てゝ、其れを下齒で輕く押へながら、いきが舌唇の隙間から漏らされる時出來る一つの清音に外ならぬ。*

48. 上記の Theodore Throstle 云々の文の中の th の示す音は [f] 音同樣に一つの摩擦音で、氣息の續く限り引き伸べられるのであるから、同時に連續音でもある。此音に對する發音記號は [θ] (此音を示すギリシアの文字を其儘採用したもの)である。

49. [θ] 音をこゑで出すと

There's no joy without alloy.

の中の th で表はしてある音、發音記號は [ð] (此音を示す古代のイギリスの文字) が出來る。

50. 今 [θ] 音と [ð] 音とを其性質の特徴に由つて表の形に示すと、次の通りになる。

齒(背)舌(端)音＝摩擦音 { 清音……[θ] / 濁音……[ð] }

* 斯くして作られる音(此れを齒背舌端音といふ)の他に、上下齒の間に舌端を狹み、之を嚙むやうにして作る同類の音、(之を齒間舌端音といふ)がある。

【注意】 この音は、わが國語にも、ドイツ語、フランス語にも無いのであるら、その練習には特に力を用ゐなければならぬ。口形については Fig. VII 參照。

51. [θ] [ð] の二音は共に同一の合字 th で書き表はされるので、th を其いづれに發音すべきか判別する事が困難である。此困難に處するには、次の三項を參考するが宜しい。

(A) th=[θ] の場合。

(1) th が語の初にある時。 例、

thank, thaw, theory, thick, thief, thin, thing, thirst, thorn, thought, threat, three, thrift, throng, through, throw, thumb, thump, thunder.*

(2) th が語の終にある時。 例、

bath, beneath, both, breath, cloth, death, eighth, forth, month, mouth, oath, path, pith, sheath, smith, sooth, south, truth.†

(3) 母音の間にある時。（ラテン出又はギリシヤ出の語

* [θæŋk]; [θɔ:]; ['θiəri]; [θik]; [θi:f']; [θin]; [θiŋ]; [θə:st]; [θɔ:n]; [θɔ:t]; [θret]; [θri:]; [θrift]; [θrɔŋ]; [θru:]; [θrou]; [θʌm]; [θʌmp]; ['θʌndə].

† [bɑ:θ]; [bi'ni:θ]; [bouθ]; [breθ]; [klɔθ]; [deθ]; [eitθ] [fɔ:θ]; [mʌnθ]; [mauθ]; [ouθ]; [pɑ:θ]; [piθ]; [ʃi:θ]; [smiθ] [su:θ]; [sauθ]; [tɪu:θ]

に此事がある)。例、

antipathy, apotheosis, apothecary, atheist, authentic, author, authority, authorize, cathedral, cathode, catholic, ether, ethics, mathematics, method.*

(4) misanthrope, panther, philanthropy.†

(5) Arthur, Athens, Bertha, Luther, Martha.‡

(6) nothing, bethink, methinks, Gothic, pithy, healthy, wealthy, earthy, earthen.§

(B) th=[ð] の場合。

(1) 次の語（主として冠詞、代名詞、副詞、接續詞）に於いては th が語の初にある場合にも th は [ð] を示す。前項 (A) の (1) 參照。即ち、

the, this, these, that, those, thou, thee, thy, thine, they, them, their, theirs, there, therefore, thither, than, then, thence, though, thus.||

* [æn'tipəθi]; [əpɔθi'ousis]; [ə'pɔθikəri]; ['eiθiist]; [ɔ:'θentik]; ['ɔ:θə]; [ɔ:'θɔriti]; ['ɔ:θəraiz]; [kɔ'θi:drəl]; ['kæθoud]; ['kæθəlik]; ['i:θə]; ['eθiks]; [mæθi'mætiks]; ['meθəd].

† ['misənθroup]; ['pænθə]; [fi'lænθrəpi].

‡ ['ɑ:θə]; ['æθinz]; ['bə:θə]; ['lu:θə]; ['mɑ:θə].

§ ['nʌθiŋ]; [bi'θiŋk]; [mi'θiŋks]; ['gɔθik]; ['piθi]; ['helθi] ['welθi]; ['ə:θi]; ['ə:θən].

|| [ði:]; [ðis]; [ði:z]; [ðæt]; [ðouz]; [ðau]; [ði:]; [ðai] [ðain]; [ðei]; [ðem]; [ðɛə]; [ðɛəz]; [ðɛə]; ['ðɛəfɔə]; [ðæn]; [ðen]; [ðens] [ðou]; [ðʌs].

(2) 次の語に於ては、th が語の末尾にあつても [ð] と發音される。前項 (A) の (2) 參照。即ち、

booth, smooth, with, bequeath (*v.*), mouth (*v.*)*

(3) 動詞の末尾の -the (此 e は發音されない)。例、

bathe, breathe, clothe, loathe, sheathe, soothe, wreathe.†

(4) blithe, scythe.‡

(5) 次のチウトン出の語に於ては th が語の中間にありながら、[ð] 音を示す。

brother, brethren, either, farther, farthest, farthing, father, feather, further, furthest, leather, mother, neither, northern southern, weather, wether, whether, worthy.§

(C) 長母音又は重母音の次に來る th で終つてゐる名詞は、單數の時は th=[θ] で、複數の時は th+s=[ð+z] である。例、

bath(s), cloth(s), lath(s), mouth(s), oath(s), path(s), sheath(s), wreath(s), youth(s).‖

---

* [bu:ð]; [smu:ð]; [wið]; [bi'kwi:ð]; [mauð].

† [beið]; [bri:ð]; [klouð]; [louð]; [ʃi:ð]; [su:ð]; [ri:ð].

‡ [blaið]; [saið].

§ ['brʌðə]; ['breðrən]; ['aiðə]; ['fa:ðə]; ['fa:ðist]; ['fa:ðə]; ['fəðə]; ['fə:ðə]; ['fə:ðist]; ['leðə]; ['mʌðə]; ['nɔ:ðən]; ['sʌðən] ['weðə]; ['weðə]; ['weðə], ['wə:ði].

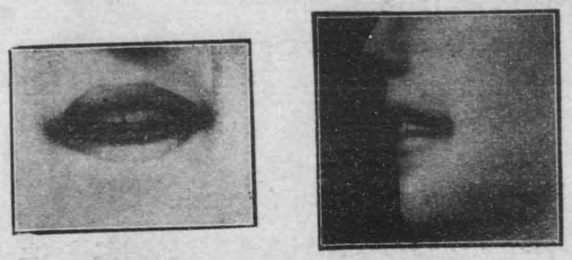
‖ [ba:θ], [ba:ðz]; [klɔ:θ]; [klɔ:ðz]; [la:θ], [la:ðz]; [mauθ], [mauðz]; [ouθ], [ouðz]; [pa:θ], [pa:ðz]; [ʃi:θ], [ʃi:ðz]; [ri:θ], [ir:ðz]; [ju:θ], [ju:ðz].

【注意】' th で終つて居る名詞の前の母音が短母音である場合には、其複數の th+s は [θ+s] と發音せられる。例、

breadth(s), breath(s) death(s), health(s), length(s), month(s), smith(s), tenth(s).*

Fig. VII [θ] [ð] の口形

口形外貌



口形縱斷面

---

* [bredθs]; [breθs] [deθs]; [helθs] ['leŋkθs] [mʌnθs] [smiθs]; [tenθs].

【注意】[2] 次の語では th の前の母音が長いのにその複數を [θs] と發音する。

fourth(s), growth(s), heath(s).*

【注意】[3] cloth (切れ地) の母音は長くも亦短くも兩樣に發音せられるから、隨つて其複數 cloths の ths も前の母音の長さ次第で [θ+s] とも [ð+z] とも成る。

【注意】[4] th の連字を [θ] とも [ð] とも發音せずに、[t] と發音する時が、稀にはある。例、

Anthony, Thames, Thomas, Chatham.†

6

52. Seldom seen, soon forgotten.

此諺の中の s の字で表はしてある音を、上に述べた [θ] 音と比較して見ると、此二音は、其音響が甚だ類似してゐる。共に連續的の口音である點も同一であるが、仔細に調べると、兩者の間に作り方の著しい差がある。[θ] の場合には、舌の前端が上下の齒の端と接觸してゐるけれども、例へば seen の s の字の示す音は、舌端が上の齒の裏手の齦に接近して其間から、いきが漏らされてゐるのである。舌の位置から言ふと、此音は [t] 音に酷似してゐる。

* [fɔ:θs] [grouθs] [hi:θs].

† ['æntəni]; ['temz]; ['tɔməs]; ['tʃætəm].

但し [t] は破裂音で此音は連續音であるから、發音の結果は一向同じくない。

53. この、音響の上からは [θ] に近く、舌の位置から言へば [t] に近い連續的の清音を、發音記號では [s] (普通の s と同一形) で示す。

54. [s] 音をころで發すると、

Zeal without knowledge is frenzy.

の中の z の字で表はしてある音、發音記號 [z] (普通の z と同一形) が出來る。

【注意】因に、我が國語の『サ、シ、ス、セ、ソ、』の中『シ』以外の音は [s] 音で始まるが、「シ」の音のみは [ʃ] (後に §9 で說く) に酷似した音で始まる。故に、例へは sea を「シー」と發音するのは、正しくない、また同樣に、「ジ」は [zi] ではなくて [ʒi] (§9 を參照) に似た音であるから、兩音を判然と言ひわけねばならぬ。

55. [s] と [z] との二音を其性質に基いて表の形に示して見ると、次の通りに成る。

舌端(前齦)音＝摩擦音 {清音……[s] / 濁音……[z]}

【注意】[s], [z] の口形圖は Fig. VIII 參照。

56. [s] 音は普通には (1) s 一つであるが、時には (2) c が (e, i, y の前にあるもの) (3) ss (4) sc (5) sch (6) st (7) sw (8) ps (9) se でも表はされる。例、

(1) *s*un, mi*s*t (2) *c*ity (3) mi*ss* (4) *sc*ience (5) *sch*ism (6) wai*st*coat (7) *sw*ord (8) *ps*alm (9) cea*se*.*

【注意】 box, fox などの x の字は [k+s] の音を示す。

57. 「z 音は普通は (1) z 一つで示されてゐるが、時に

Fig. VIII [s] [z] の口形

口形外貌

口形縱斷面

* [sʌn], [mist]; ['siti]; [mis]; ['saiəns]; ['sizm]; ['weiskout] [sɔ:d]; [sɑ:m]; [si:s].

は (2) zz (3) s (4) ss (5) sc (6) cz でも示される。例、

(1) *z*inc, *z*ig*z*ag (2) bu*zz* (3) wa*s* (4) po*ss*ession (5) de*sc*ert (6) *Cz*ar.*

【注意】[1] 母音、鼻音、又は濁音で終つてゐる語に文法上（名詞の複數、領格、及び動詞の三人稱單數を示す爲）書き添へられる s 字は [z] 音を示す。例、farmers, pens, dogs; boy's, king's, Ned's; sees, comes, rubs.†

【注意】[2] example, anxiety などの x の字は [g+z] の音を示す。

7

57. Round a rugged rock a ragged rascal ran.

此發音遊戯に用ゐる文句の中の r の字で示してある音、發音記號 [r]（普通の r と同一形）を我が國の「ラ、リ、ル、レ、ロ」の基音（此發音記號を區別の爲に姑く [R] として）と比較すると、次の異同が知れる。

(1) [r] も [R] も共にこゑで造られる。

(2) [r] は [z] に似た一つの連續音であるが、[R] は [d] に似た一つの破裂音である。

即ち我が國の [R] 音は、一度限りに切れて仕舞ふ破裂

* [ziŋk], ['zigzæg]; [bʌz]; [wɔz]; [pə'zeʃən]; ['dezət]; [zɑ:].

† ['fɑ:məz], [penz], [dɔgz]; [bɔiz], [kiŋz], [nedz]; [si:z], [kʌmz], [rʌbz]

音であるのに反して、英語の [r] 音は、何時までも引き延べて發音の出來る摩擦音である。

58. [ʀ] 音を發するには、舌端をば [d] の時の通り上の齦の裡に當てるのであるが、舌を稍後の方へ引いて、極めて輕く當てる點が [d] の作り方と違ふ點である。[r] 音を作る場合にも、舌端をば [z] の時より稍後ろの方へ引いて、舌端と齦との間からこゑを送り出す。出てゆく空氣の爲に舌の緣が前後に振動する、此音が [r] である。

【注意】[1] 英語の r の示す音の萬國發音協會の正式の符號は、倒さまの r 卽ち [ɹ] であつて、ここに用ゐた [r] は所謂わが國の捲き舌のラ行音又、ドイツ語フラスン語の r 字の示す音にあたり、舌の前部をこゑで、翻翻と、はためかして、齦との間に一種の鳴りを起す時生ずる音を指すのであるが、英語の音を專ら取扱ふ時には、便宜の爲、見慣れた [r] を用ゐてすませる。

【注意】[2] 英語でも、ある地方では、捲き舌の r 卽、正式符號で [r] と書く音があるが、標準語ではこれを認めてゐない。

【注意】[3] さきに我が國のら行音を [ʀ] で表はして置いたが、これは、實は正式な發音の符號でいふと [r] とも [ɹ] とも異る、前にも述べた、一種の特殊な破裂音なのである。

59. Time will bring you your reward,
Try, try, try again.

此二行の中の bring の r の示す音と try の r の示す

音とを仔細に比べて見ると bring の方の音は其前に [b] といふ濁音が來てゐる爲に、こゑが音響の入から掛かつて完全な [r] 音を成してゐるが、try の場合では、[r] 音の前の [t] が清音である爲、其影響で、次に來る [r] 音の入がいきで發せられ、中に至つて始めてこゑが用ゐられるので、斯の如き [r] は、完全なものとは稍其趣を異にしてゐる。卽ち try の [r] 音は [r] の清音、發音記號 [r̥] を其頭に含んでゐる事を記憶すべきである。

【注意】特別の必要のある場合の外は try, tree 等の [r] 音は [r̥] を以て示すことをせず、單に [r] とのみこれを記す。

60. [r̥] と [r] との二音を其性質に基いて表に作つて見ると次の通りになる。

舌端(後齦)音＝摩擦音 ｛清音……[r̥]
　　濁音……[r]

【注意】この音の口形については Fig. IX 參照。

61. [r] 音は普通には (1) r の字一つを以て示されるのであるが、時には (2) rr 又は (3) rh で書かれる。例、(1) *r*ing, *r*oad (2) so*rr*y (3) *rh*eumatism.*

【注意】[1] r の字が [r] 音を示すのは、音節の頭にある時のみで、其他の場合に於ては、次の二樣の音に當る。

* [riŋ], [roud]; ['sɔri]; ['ruːmətizm].

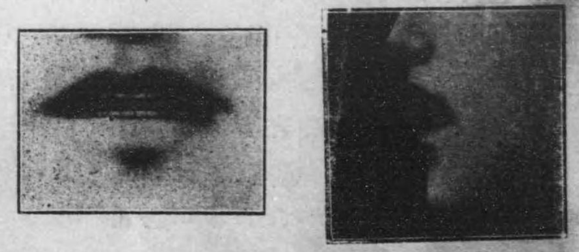
(1) hear, door, our の如く母音 [ə] (§ 25 參照) を示す。

(2) lord, bird, for, are の如く母音の延長を示す。

【注意】[2] to take care‿of; our‿own house の如き場合に於ては、r (又は re) は [ə] 音を示すと同時に [r] 音としても次の語頭の母音と熟して亦復活せられ、また far‿away; they are‿all well に於ては、r (又は re) は母音の延長を示すと同時に [r] 音が同じく復活せらるゝのである。この現象を "r-linking" と呼ぶ。

Fig. IX [r] ([r̥]) の口形

口形外貌



口形縱斷面

【注意】[3] 北米合衆國の發音では、音節の頭に出てゐない r 字は、其の在る處の如何に拘らず [ə] を示す。

8

62. Time heals all ills.

此諺の中の l 又は ll で示してある音の成立を、之を發音しながら、自身で調べてみる。 先づ舌の尖が上の前齒の裡の齦にひたと着いてゐる。 そして舌の左右の緣は遊離してゐて、其側面を通つて、こゑが口外に送り出される。上の l 又は ll の音、發音記號 [l] (常の l と同一形) はかくて出來るのである。此音の他の音と異なる主な點は、之を作る時のこゑの通路が、他の音の場合の樣に、口の正面でなく、其右側、左側又は兩側である事で、其樣を知る爲には、奧齒の痛む時、冷い外氣を口の側面へ吸ひ込む、それと同じ事を先づ試みて、更に、かく吸つた外氣を本の通りの通路から外へ送り出して見る —— いきでなくこゑに直して——のが肝心である。

【注意】 [l] を發する際、普通には舌の緣と齦との間に或る摩擦の音が聞えるが、舌端を上齦にあてたまゝ、口を廣く開いて、舌の側面を左右から中央へ緊めつけて、舌身を細く圓める場合には、摩擦の音が失せてゥ音に似た一種の母音が聞えて來る。 例へば mill は、ミウと殆ど同じに發音せられるのである。 [l] が、音の末

に來る時には、多くこの傾向があるのであるが、强いて母音のやうに發音するには當らないのである。

63. There's many a slip,

'Twixt the cup and the lip.

此諺の中の slip の [l] 音は、其前に [s] といふ清音がある爲、lip の [l] 音程完全でない。try の [r] 音同樣、一旦清音の [l̥]、發音記號 [l̥] (l の下に ̥ を附けたもの) となり漸次常の [l] 音に移るのである。

【注意】[1] 特別の必要のある場合の外は slip, class 等の [l̥] 音は [l̥l] を以て示すことをせず單に [l] とのみ之を記す。

【注意】[2] [l̥] 音は、我が國には普通用ゐられぬ音であるが、英、佛、獨語にも朝鮮語にもある。支那語には [l̥] 音があつて [r̥] 音がない。

64. [l] 音と [l̥] とを其性質に基いて表の形に示して見ると、次の通りになる。

(舌齦)側音＝摩擦音 { 清音……[l̥]
濁音……[l]

【注意】この音の口形については Fig. X 參照。

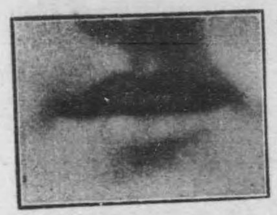
65. [l] 音はを表はすには普通に (1) l (2) ll (3) le が用ゐれてゐる。例、

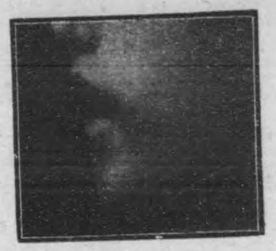
(1) *l*ook, p*l*ura*l* (2) mi*ll*, *Ll*oyd (3) ma*le*.*

* [luk], ['pluərəl]; [mil], [lɔid]; [meil].

Fig. X [l] ([l̥]) の口形

口形外貌





口形縱斷面

氣息の通路の圖

←—は [l̥] [l] を出す時の氣息の通路を示す。

9

66. Be sure your sin will find you.

此諺の中の sure の s の示す音と sin の s の示す音とを比較するに、同じく s 文字で書かれてはゐれど、sin の s は Make hay while the sun shines の sun の s と同じく [s] 音を示し sure の s は shines の sh と同じ音を示してゐる。それで shine の sh の音、發音記號 [ʃ] (s の胴を長くした文字) を作るには、唇を漏斗の樣に絞つて突き出し、舌は [s] 音を作る時より稍、口の奥へ引込めて上の齦に廣く近寄せ、其間からいきを軋ませるのである。

67. 此場合にころを軋ませると、

Measure for measure.

の s が示す音、發音記號 [ʒ] (z の足を伸したもの)が成り立つ。

【注意】 日本語の「シ」「ジ」の中の父音は、舌の端よりやゝ奥の部分が、上顎の內面の齦に近づけられて生ずる音であるから、[ʃ] [ʒ] とは、出來方が多少違ふ。

68. [ʃ] と [ʒ] との二音を其性質に基いて表の形に示して見ると、次の通りに成る。

舌緣音＝摩擦音 { 清音……[ʃ]
　　濁音……[ʒ]

【注意】 この二音の口形については Fig. XI 參照。

69. [ʃ] 音は、普通には (1) sh で書き表はしてあるが時には (2) ch (3) s (4) si (5) ss (6) ssi (7) sci (8) ti (9) c (10) ce (11) ci (12) sch でも示される。例、

(1) *sh*ip, fi*sh* (2) ma*ch*ine (3) *s*ugar (4) A*si*a
(5) a*ss*ure (6) pa*ssi*on (7) con*sci*ous (8) na*ti*on
(9) offi*ci*ate (10) o*ce*an (11) an*ci*ent (12) *Sch*iller

【注意】[1] anxious の x の字は [k+ʃ] 音を示す。

【注意】[2] church, watch の如き語の ch 又は tch は [t+ʃ] の複音を示す。

【注意】[3] branch, French に於ける如く n 音の次に來る ch は [ʃ] とも [tʃ] とも發音せられる。

【注意】[4] [tʃ] を示す文字は普通には (1) ch (2) tch であるが、時には (3) t (4) te (5) ti (6) c でも示される。例、

(1) *ch*urc*h* (2) wa*tch* (3) na*t*ure (4) cour*te*ous (5) ques*ti*on
(6) violon*c*ello†

70. [ʒ] 音に對しては、一定の文字はない。普通には (1) s 又は (2) z であるが、時には (3) si (4) zi (5) ge でも示される。例、

---

* [ʃip], [fiʃ]; [mə'ʃi:n]; ['ʃugə]; ['eiʃə]; [ə'ʃuə]; ['pæʃən]; ['kɔnʃəs]; ['neiʃən]; [o'fiʃieit]; ['ouʃən]; ['einʃənt]; ['ʃilə].

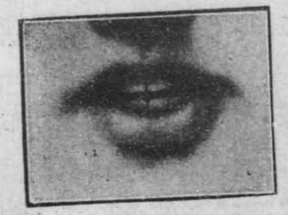
† [tʃə:tʃ]; [wɔtʃ]; ['neitʃə]; ['kɔ:tʃəs]; ['kwestʃən]; [vaiələntʃelou].

(1) measure, pleasure, usual (2) azure (3) provision (4) glazier (5) rouge.*

【注意】[1] [j] judge, village] の如き語の 又は ge 又は dge は [d+ʒ] の複音を示す。

Fig. XI [ʃ] [ʒ] の口形

口形外觀



口形縱斷面

* ['meʒə]; ['pleʒə], ['ju:ʒuəl]; ['æʒə]; [prə'viʒən]; ['gleiʒə]; [ru:ʒ].

【注意】[2] change, hinge の如く n の次に來る ge は [ʒ] とも [d+ʒ] とも發音せられる。

【注意】[3] [dʒ] を示す文字は、普通には (1) j (2) dge であるが、時には (3) g (4) ge (5) gi (6) gg (7) dg (8) di (9) d (10) ch の事もある。例、

(1) *j*oy (2) we*dg*e (3) *g*aol (4) pi*g*eon (5) reli*g*ious (6) su*gg*est (7) ju*dg*ment (8) sol*di*er (9) gran*d*eur (10) Greenwi*ch**

10

71. Be sure your sin will find you out.

此諺の中の your と you との y の字に就いて其示す音を調べて見ると、其音が作られる時、舌の中程が上顎の中程に接近して、其間からこゑが軋んでゐることが知れる。此音を示す發音記號は [j] (常の j と同一形)である。[j] 音をこゑで出さずにいきで出すと、「キップ」(切符)「キッポー」(吉報)などに於て語頭の [k] 音の次に聞かれる摩擦の音、發音記號 [ç] (常の c の字の下にコンマを添へたもの)が出來る。但し此 [ç] 音は英語には使はれてをらぬ。只、huge [hju:dʒ] sue [sju:] 等の [j] 音が、その前の清音

* [dʒɔi]; [wedʒ]; [dʒeil]; ['pidʒən]; [rɪ'lidʒəs]; [sə'dʒest] [dʒʌdʒmənt]; ['souldʒə]; ['grændʒə]; ['grinidʒ].

に引かれて、[hçu:dʒ], [sçu:] と成る傾きがある位なものであるが、それも [ç] にせぬ方がやはり正しいのである。

【注意】[1] 我が國語にも [j] 音を示す字は「ヤ」「ユ」「ヨ」の三つがあるが、軋みが極めて微かで「イァ」「イゥ」「イォ」と殆ど變りがない。

【注意】[2] 日本語の「ヒト」(人)、「アサヒ」(朝日) などの「ヒ」を、ローマ字で hi と書くが、その發音は、實は [ç] 又は [çi] である事は注意を要する。

72. [ç] と [j] との二音を其性質に基いて表の形に示して見ると次の通りである。

中舌(中顎)音＝摩擦音 { 清音……[ç]
　　濁音……[j]

【注意】 この二音の口形については Fig. XII 參照。

73. [j] 音は普通には (1) y で示されるが時には (2) i (3) e (4) j で書かれてゐる。 例、

(1) *y*ear, *y*oung　(2) Will*i*am　(3) hid*e*ous

(4) hallelu*j*ah*

【注意】 'y' の字が [j] 音を示すのは音節の頭にある時のみで、其他の處では母音 [i] 又は [ɪ] (§ 15 參照) を示す。 boy や petty の y は [j] ではなく、[bɔi], ['petɪ] である。

* [jiə], [jʌŋ]; ['wiljəm]; ['hidjəs]; [hæli'lu:jə].

Fig. XII [ç] [j] の口形

口唇形 外貌

口形縱斷面

11

74. Where there's a will, there's a way.

此諺の中の where の wh の示す音と will 及び way の w の字の示す音とを比較すると、此二音を發する爲には、唇を圓くして突き出し、舌の背を高く上顎の後ろ手へ揭

け、其間から唇と舌の背との二個所に氣息を軋しませるのであるが、此際いきを用ゐれば where の wh の音、發音記號 [ʍ] (w を顚倒したもの)が出來、こゑを用ゐれば will や way の w の音、發音記號 [w] (常の w の字と同一形) が出來るのである。

【注意】 日本語には [ʍ] 音は用ゐられない。輕微の [w] 音はある。今日では、ア音の前卽ち「ワ」音に顯はれるに過ぎない。

75. [ʍ] と [w] との二音を其性質に基いて表の形にして見ると次の通りに成る。

(兩唇)後舌音＝摩擦音 { 清音……[ʍ]
濁音……[w]

【注意】[1] 此音は舌の後部が上顎に高く揚げられる點からは、後舌音として扱はれるが、之を作る際、唇が圓く突き出さるゝ點から視れは、兩唇音とも考へ得られる。Fig. XIII 參照。

【注意】[2] 今日の標準英語を使ふ人々の間には [ʍ] 音を用ゐずに [w] 音を其代りに使ふ傾向がある爲、witch も which も往々同一に發音せられてゐる。然し、本邦では此二音の區別を現に保存してゐるし、また之を保存しておく方が將來便益が多いから、吾人は此區別を棄てぬ樣に心したいものである。

76. [ʍ] 音を示す文字は wh のみである。例、

*wh*at, *wh*ere*

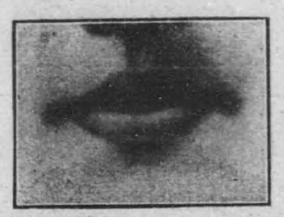
* [ʍɔt], [ʍɛə].

77. [w] 音を示す文字は、普通は (1) w であるが、時には (2) u が用ゐられてゐる。例、

(1) *w*atch, *w*ork (2) q*u*een, disting*u*ish*

Fig. XIII [ʍ]と[w]の口形

口形外貌



口形縱斷面

* [wɔtʃ], [wə:k]; [kwi:n], [dis'tiŋgwiʃ].

【注意】[1] w の字が [w] を示すのは音節の頭にある時はかりで、其他の場合では母音 [u] (§ 24 參照) を示すのである。

【注意】[2] wh の連字は、次の如き場合に於て [h] 音 (§ 12 參照) を示す。 who, whose, whom, whole, whoop.

12

78. Home is home, be it ever so humble.

此文の中の home と humble との二語から其頭にある h の字が示す音を取り去つて殘餘の部分を發音して見ると、發音の際の口形(舌や唇の位置)は全然同じであるが、唯、喉の奥から急に送り出されるいきの軋みが聞えて來ない。これに依つて觀ると、此 h の字が示す音、發音記號 [h] (常の h と同一形)は、其次に來る母音 (例、[ha] の [a]) と全く同じの口形を作つておいて、肺臟から急速にいきを送り出して、これをば喉頭の中の開いた聲門の左右の扉に軋(きし)ませた時の摩擦の音であることが知れる。要するに [h] 音は一つの獨立の口形を有つてゐる音ではなく、他の音の口形の上に送り出す氣息の强さに由つて生ずる隨伴の音である。[h] を指して、或る發音學者は無聲の、即ち清音の母音といふのも、この爲である。

喉頭音＝摩擦音——清音……[h]

13

79. 以上數々述べた所は、標準英語に普通の場合に顯れる音の中で、之を發する際 (1) 氣流の通路が鼻腔である者 (之を鼻音といふ) と、(2) 氣流の通路が口腔である音 (鼻音に對して之を口音と云ふ) とであるがこの (2) は又即ち (i) 破裂の音の聞える者(之を破裂音といふ)又は (ii) 摩擦の音の聞える者 (之を摩擦音といふ) に別けられて都合三種であるが、此三種は總稱して、通常之を父音と云ふ。之に對し、口音にして之を發する際、破裂の響も摩擦の響もなく、唯、反響の音のみある者を總稱して母音と云ふ。次章の主題は母音である。母音にはいきこゑの區別即ち清濁の區別はない。母音はみなこゑで發せられる。即ちいづれも一種の濁音である。

【注意】[1] 摩擦音の中には、氣流の通路が口の中央正面である者 (1) 央音と、氣流の通路が口の側面である者 (2) 側音との區別を立てる事が出來、又、央音の中では特に [s-z], [ʃ-ʒ] の音、即ち吾が「サ」、「ザ」、「シャ」「ジャ」行の音を、摩擦の音の著しい爲特に擦音と名けて區別して置いた。

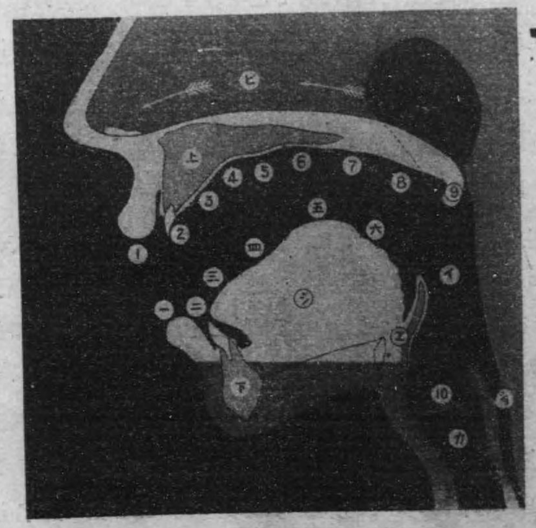
【注意】[2] 普通に父音として扱はるゝ音の中、鼻音と側音とは、其性質が母音に同じで、鼻音は其音の通路が口でないと言ふ差が

あるばかりであるし。また側音も或る場合には、母音と同じ響を生じ、之と異る點は、其通路が口の正面でないと云ふだけである事は、既に（§ 62［ヶ意］參照）注意しておいた。

【注意】[3]　清音、濁音といふ區別は、いきを材料とするかこゑを材料とするかによつて別れる事は前述の通りであるが、我國で言ふ半濁音の基本の音は一つの正しい清音である。濁音には關係がない。名稱に誤られてはならぬ。

【注意】[4]　父音全體の總括としては Fig. XIV 參照。

Fig. XIV　父音分類總括圖



父音分類表

			I.	II.	III.	IV.	V.	VI.	VII.
			1+一	2+一	2+二	3+三	5+四	7+五	10
鼻音			m̥-m			n̥-n		ɲ̥-ŋ	
口音	音破裂		p-b			t-d		k-g	
	摩擦音	央音	(ʍ-w)	f-v	θ-ð	r̥-r	ç-j	ʍ-w	h
		擦音				s-z ʃ-ʒ			
		側音				l̥-l			

この表は、XIV 圖と引き較べて讀むので、今まであげた音をば I から VII までの類に分ち各の場合に用ゐらるる諸機關合力の有樣をば **1+一** といふ如き部位の合符を以て示したもの。即 1 も 一 も共に上圖で見ると唇であるから、兩唇の合力の結果は [m̥-m] 又は [p-b] なごいふ兩唇音を生むのだ、こやうに見るのである。數字で示された諸機關の名稱は Fig. II に詳しい。この表のまゝに今まで各種の音に與へて來た名稱を並べて見れば次の樣になる。（§ 1）なごいふ但し書きは、參照すべき § の名である。尙、上表中、[p-b] の如く示してあるのは、その左が清音で右が濁音の意である。

			I.	II.	III.	IV.	V.	VI.	VII.
			1+一	2+一	2+二	3+三	4+四	7+五	10
鼻音			兩唇音 (§ 1)			舌端上齦音 (§ 2)		舌背軟口蓋音 (§ 3)	
口音	破裂音								
	摩擦音	央音	[兩唇後舌音] (§ 11)	上齒下唇音 (§ 4)	齒背舌端音 (§ 5)	舌端後齦音 (§ 7)	中舌中顎音 (§ 10)	兩唇後舌音 (§ 11)	喉頭音 (§ 12)
		擦音				舌端前齦音 (§ 6) 舌緣音 (§ 9)			
		側音				舌齦側音 (§ 8)			

第二章　母音

14

80. What can't be cured must be endured.

此諺の第二語、第四、五、七の各語はいづれも力を込めて發せられ、第一語と第三語と第六語のみは輕微に言はるゝのであるが、その通りの輕重で全體を發音する際、第二語の can't と第四語の cured と第六語の be について、

其中に含まれてゐる母音をそれぞれ比較對照して見ると、誰にも次の事項が感知せられる。

【注意】 上の文に就ても認められる通りに、一つの文全體を口にする際には、其中の語の輕重によつて、文句の間に抑揚が生じる。即ち或る語は重く、或る語は輕く發音せられるので、重く發音せられる語を、强勢が掛つた語、輕く發音される語を、强勢が掛らない語、又は弱勢の語といふ。更に强勢の掛つた語につい見ると、强勢は語全體に掛るのではなく、單音節の語 (what, can't, be, cured, must, be の類) に於ては其中の母音に、また複音節の語 (endured の類) に於ては此中の一つの音節の中の母音に掛けられるのである。但し三音節以上の語に於ては、其中の一つに第一の强勢が掛けられ殘餘の音節の中の一つに、稍微弱の第二の强勢が掛けられる事がある。

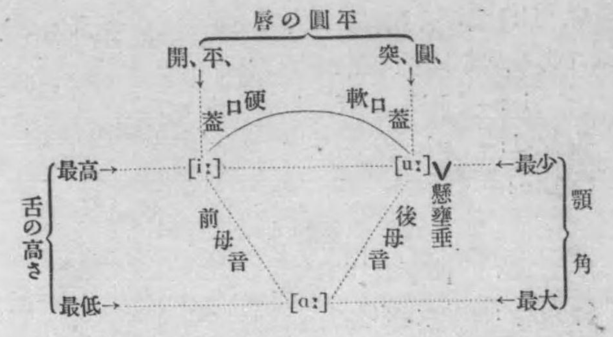
(1) can't の「アー」の場合に於いては、口を廣く開く。其廣さは我國語の「アヽ」(噫) の場合より更に大きいが cured と be の場合に於ては口を開く事が極めて狹く、其狹さは我が國語の「空氣」の「ウー」や「最負」の「イー」の場合と同じく些いのである。 即ち can't の場合では母音を發する時の上顎に對する下顎の角度 (之を顎角といふ) が大で、cured と be との場合では、母音を發する時の顎角が、小なのである。

(2) can't の場合には唇が廣く圓く開かれるが、cured

の場合には唇が口笛を吹く時の樣に小い圓形を作つて、外面へ突き出されるし、また be の場合には上下の唇が一文字をなして、其兩方の隅（之を口角といふ）が左右へ引き分けられる傾向がある。

(3) can't の場合では舌の後部が少しく隆起して前部へ稍傾斜しては居るが、其度が極めて緩漫で、下顎の齒の垣の中に平坦に横臥して居るこ言つてよい。この事は can't の母音を發しながら、鏡に對して自分の口を寫して見るこ、誰にでも知れる。之に反して cured の母音を發する時には、前述の如く唇が圓く突出するこ共に、舌の後部全體が軟口蓋に向つて高く隆起するし、また be の母音を發する時には、唇が一文字になつて、口が左右へ引かれるこ同時に、舌の前部全體が、硬口蓋に向つて著しく隆起するのである。

81. 今 can't の中の母音、發音記號 [ɑ:] ([ɑ] に長音符 [:] を添へたもの) を姑く常位の母音こ見、cured の中の母音、發音記號 [u:] (即ち [u]+[:]) を、舌の隆起の方向に由つて後母音こ名づけ、又、be の中の母音、發音記號 [i:] (即ち [i]+[:]) を前母音こ名づけ[illegible]に掲げる圖は [ɑ:] を中心こして [u:] こ [i:] この兩[illegible]に發音が仕分けられるについての舌こ唇こ顎角この[illegible]を表示したものである。



15

82. (1) feel eel keel seed week
deed teem sweep fleece freeze
cheese kneel Greek bee beef
weed beech tree heed speech
(2) beat eat meat seat cheat
deal meal heal neat seal
pea reach teach peak speak
leak heave weave cream peach

上に揭げた語に就いて調べて見るこ、其中に含まれてゐる母音は前節に述べた [i:] 音で、之を作るには、舌の前部が軟口蓋に向つて摩擦の音の起らぬ限り高く上げられるのである。即ち feel は [fi:l] beat は [bi:t] である。

【注意】此 [i:] の音を發音する時は、舌の局部が隆起して、上顎この間が狹くなる爲、その末尾が [i] から [j] になり易く從つて [i:] を [ij] 又は [i:j] こ發音する人が往々にある。

83. [i:] 音を示す普通の文字は上記の (1) ee 又は (2) ea であるが其外に次の如き例がある。

(3) ie :— field grief piece priest
(4) ei :— seize
(5) e :— me he she we
even evening fever equal
(6) eo :— people ['pi:pl]
(7) ey :— key [ki:]
(8) i (-e) :—suite [swi:t]
machine [mə'ʃi:n] marine [mə'ri:n]
routine [ru'ti:n] police [pə'li:s]
(9) eau :— Beauchamp ['bi:tʃim]
(10) i :— chagrin [ʃə'gri:n] Czarina [zə'ri:nə]
(11) i (-que)(-gue) :—antique [æn'ti:k] oblique [ob'li:k]
unique [ju'ni:k] fatigue [fə'ti:g]
(12) æ :— Cæsar ['si:zə] Æneas ['i:niæs]
(13) ui :— mosquito [mos'ki:tou]

84. (1) beer steer cheer deer queer
jeer peer sneer sheer seer
(2) fear ear year near spear
hear tear (*n.*) dear rear snear

上に掲げた語に就いて其中の母音を調べて見ると、其首めに [illegible] た [i:] と同類の音が認められるが、只其

長さが [i:] より遙かに短かく、其半分位である事が知れる。また其末尾には一つの極めて曖昧な音、發音記號 [ə] (e を倒にしたもの)が添つてゐる。此 [ə] 音は其前に來る音を短くする力を持つて居る。beer, fear が綴字から言ふと [bi:ə] や [fi:ə] であるべき筈だのに、さうでないのは [ə] の力の影響に外ならぬのである。

【注意】 母音の半長音である事を示す必要がある時は [:] の上半を其次に加へ [bi:ə], [fi:ə] とするのであるが普通の場合には之を單に [biə] [fiə] とする。之を [bi:ə], [fi:ə] の如く長母音に發音する事は、大なる誤である。

85. [iə] の示し方は (1) eer (2) ear の外にも、次のやうな例がある。

(3) ere :— mere here sphere [sfiə]
(4) ier :— pier [piə] bier pierce [piəs] fierce

86. bit pit lip ship stick
wit witch which milk silk
quick trick pill fish fix
film chill wind (*n.*) wing swing

以上に掲げた語の中の母音、發音記號 [i] (常の i の字と同一形)と前述の [i:] とを比べると [i:] の場合には舌の口蓋に揚げられる局部にこり (凝固) を起して其部分が

一層隆起するが、[i] にはそれが無い。 また [i:] は長いが [i] は短いのである。

【注意】 [i] 音は弱い音、卽「强勢(ｱｸｾﾝﾄ)」(§34參照)の掛かつてゐない母音である時 (此場合の母音を弱母音といふ) 舌の局部の緊張が無い爲に往々次に說く [e] 音に類似する。 斯く [e] に似た音を本來の [i] 音と區別する爲に [ɪ] (首文字 I の小形なもの) を用ゐることもある。 卽ち below は [bi'lou] が [bɪ'lou], very は ['veri] が ['verɪ] になるのである、が普通は [i] で濟ませる。

87. 强母音の [i] は、普通 (i) の字で示されてゐるが、其外に次の如き例がある。

(2) y :— myth [miθ] hymn [him]
pyramid ['pirəmɪd] crystal

(3) e :— England English pretty ['pritɪ]

(4) o :— women ['wimɪn]

(5) u :— busy ['bizɪ] business ['biznɪs]

(6) ui :— build building built

(7) ie :— sieve [siv]

(8) i (-e) :— give live

(9) ee :— breeches ['britʃɪz] Greenich ['grinɪdʒ]

弱母音の [ɪ] は次の如き文字にて示されてゐる。

(1) a (-e) :— village ['vilɪdʒ] courage ['kʌlɪdʒ]
palace ['pælɪs] manace separate ['sepərit]
palate language ['læŋgwɪdʒ]

(2) e :— below belong become begin
extreme [ɪks'tri:m] except deserve
endeavour [ɪn'devə] college ['kɔlɪdʒ]
tempest ['tempɪst] secret ['si:krɪt] wicked
churches ['tʃə:tʃɪz] cricket earnest
linen ['linɪn] fishes ['fiʃɪz] wishes

(3) i :— inform impatient [ɪn'peiʃənt] divide
irregular [ɪ'regjulə] discover pudding
wedding morning cabin examine
native ['neitɪv]

(4) y :— plenty holy ['houlɪ] clergy ['klɑ:dʒɪ]
city ['sitɪ]

(5) u :— minute ['minɪt] lettuce ['letɪs]
ui :— biscuit ['biskɪt] circuit ['sə:kɪt]

(6) ai :— captain [kæptɪn] fountain mountain
ay :— always ['ɔ:lwɪz] Sunday ['sʌndɪ]
Monday Tuesday

(7) ea :— guinea ['ginɪ] forhead ['fɔrɪd]
ee :— coffee ['kɔfɪ]
ei :— forfeit ['fɔ:fɪt] foreign ['fɔrɪn]
sovereign ['sɔvərɪn]
ey :— donkey money ['mʌnɪ] alley ['ælɪ]
valley
ie :— Bessie ['besɪ] ladies ['leidɪz]

Fig. XV [i:] [i] の口形

口形の外貌

口形縱斷面

(この口型から [iə] 及び [ɪ] が生ずる)

16

88. (1) mail tail sail rail nail
pain aid maid wait waist
chain train grain stain strain

(2) way tray stay gray play
pray bray clay gay pay

(3) made lake state bake wake
state grave trace trade wade

上に掲げた語の中に含まれてゐる母音、發音記號 [ei] (=[e+i]) を調べて見ると、其音の首めは、上に述べた [i] 音を發しながら、顎角を少しく廣くし、舌の高さをやゝ低くすると出來る音で、其性質は開口音(即ち唇を窄めずして作るもの——唇を圓めて作る母音を合口音といふ)で、且つ舌の局部の凝固を生ぜざる音(之を廣母音と言ひ、凝固を來す音を狹母音といふ)である。斯くて成る [e] 音の末尾に、86 節に說いた [i] 音と同じ性質のもので、唯それより稍低い舌の位置で出來る音(發音記號は、强勢が無い弱い母音だから儼密に言へば [ɪ] であるが、普通には唯の [i] で示す。)を添へると、mail の ai, way の ay, made の a(-e) の示す二重母音が出來る。

89. [ei] の音は、普通は (1) ai (2) ay 又は (3) a (-e) で示されてゐるが、其他には次の如き例がある。

(4) ea :— break steak [steik] great

(5) ei :— rein skein

(6) eig :— reign [rein]

(7) eigh :— eight eighth [eitθ] weight
freight [freit] weigh neighbour ['neibə]
(8) ey :— greyhound
(9) ao :— gaol [dʒeil] gaoler ['dʒeilə]
(10) au :— gauge [ɡeidʒ]
(11) aigh :— straight
(12) aig :— champaign ['tʃæmpein] campaign
(13) ag :— champaigne [ʃæm'pein]
(14) alf :— halfpenny ['heipənɪ]
(15) a(-st)e :—waste haste taste paste chaste
change strange bathe vague [veiɡ]
plague [pleiɡ]
(16) eh [ei]
(17) aye [ei] (「いつも」)
[參照] aye [ɑi] (「然り」)
(18) ate [et *or* eit]

【注意】 此音を發する際 [ei] が [eɪ] の如く引き伸べらるゝ傾が本邦人にある。[ei] の [i] の失はれない樣に十分心を用ゐなければならぬ。

90. (1) bed ten wed net nest
get set wet pet text
bell sell well tell shell
spend mend bench wedge length

上に掲げた語の中に含まれてゐる母音は、前節の [ei] の首めの音即ち [e] と先づは同一のもので、唯之と違ふ點は、其普通の形に於ては [e] 音程、舌の位置が高くなく、口角も其れより稍廣い處にあるのである。故に微細な區別を設ける必要のある時は、之を [e] (横體の e の字) で示す

Fig. XVI [e] の口形

口形の外貌

口形縱斷面

(この口型から [ei] 及び [e] が生れる)

さだめであるが、兩者の差異が極めて尠いから、普通には [e] を以て [ɛ] を兼ねしめた方が却つて便利である。

【注意】 これは我國の「エ」と殆ど同じものであるが、我國では、これを引伸べる時「エー」とも「エエ」ともなり得る。が、標準の英語では、之を長く言ふ時 [e] の引延したのは用ゐずに [ei] となるのである。

91. [e] (=[ɛ]) を示す文字は普通 (1) e であるが、其外に次の如き例もある。

(2) ea :— head stead lead (*n.*) dead death
deaf spread health wealth dread
tread breast breath dreamt [dremt]
thread meant [ment] sweat [swet]
breadth [bredθ] stealth [stelθ]
read (*p.p.*) eat (*p.p.*) [et] cleanse [klenz]
cleanly breakfast measure pleasure
treachery pleasant meadow feather
leather jealous ['dʒeləs] zealous ['zeləs]
weapon wealthy healthy ['helθi]
stealthy ready already

(3) a :— any many Thames [temz]

(4) said [sed] saith [seθ] again against

(5) says [sez]

(6) heifer ['hefə] leisure ['leʒə]
Teicester ['testə]

(7) friend [frend]

(8) bury ['beri]

(9) leopard ['lepəd] Geoffrey ['dʒefri]
jeopardy ['dʒepədi]

(10) Reynold ['renld]

17

92. (1) hare mare care rare bare
stare spare glare dare fare

(2) air pair fair hair stair

上に掲げた語の中に含まれてゐる母音を調べて見ると、其れは單純な音でなく [ei] が二重母音である如く、此れも亦二重母音である事が知れる。そして二重母音の首めの音は、前述の [e] 音に酷く似てはゐるが、[e] よりも更に舌の高さが低い、また顎角が大きい。此れは [e] と同じく開口の音ではあるが、また [e] と違つて一つの狹母音であるのみならず、其長さも半長音である。此音に對する發音記號は [ɛ] である。此音には其末尾に必ず [ə] 音 (84 節參照) が附隨してゐる。[ɛ] の長さの半長なのも蓋

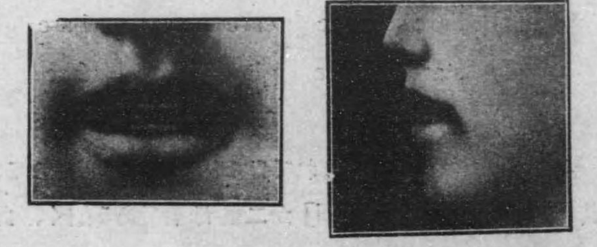
しその爲である。

【注意】[1] 强ひて半長音である事を示す必要のある時は hair や air を [hɛˑə] [ɛˑə] と書くが、普通の時は唯 [hɛə] [ɛə] とのみ書く。之を [hɛːə] [ɛːə] の如く長母音に發音する事は大なる誤である。

【注意】[2] layer ['leiə], player ['pleiə] の如く [ei] と [ə] とが判然獨立した二つの音節に言ひ分けられる時は、三重母音ではない。(100 節參照)

Fig. XVII [ɛə] の入の口形

口形の外貌



口形縱斷面

93. [ɛə] の示し方は (1) are (2) air が普通であるが、其外に次の如き例がある。

(3) bear :— bear wear [wɛə] swear tear (*v.*) [tɛə]

(4) eir :— their theirs [ðɛəz] heir [ɛə]

(5) ere :— there where ere [ɛə]

(6) ar :— scarce [skɛəs] scarcely ['skɛəsli]
parent ['pɛərənt] scarcity ['skɛəsiti]

(7) e're :— e'er [ɛə] ne'er [nɛə]

(8) ayor :— mayor [mɛə]
ayer :— prayer [prɛə] (「祈禱」)
[參照] prayer ['preiə] (「祈る人」)

18

94.

fact	act	tact	cat	rat
mat	pack	lack	hat	match
black	back	trap	strap	stamp
bat	damp	pan	crack	track

上に揭げた語の中の母音、發音記號 [æ] (a と e との合字)は既に說いた [e] に似てはゐるが、更に [ɛ] に似てゐる。尙それよりも一層類似の者は、前節の [ɛ] 音である。只 [ɛ] 音と [æ] 音との違ふ所と言へば、[æ] は [ɛ] より

更に一層顎角が廣く舌の高さも一層低いのみならず [æ] は短音で且つ廣母音である。

【注意】 [æ] の音を會得するには之をは、[e] 音と次に說く [ɑ] 音との間の音と考へるが宜しい。[æ] と [ɛ] との相違に關しては、種々の說があつて、或る人は、舌の局部に力を込めて發音すると [ɛ] が出來、力を拔いて發音すると [æ] が出來るといふ。

Fig. XVIII [æ] の口形

口形の外貌

口形の縱斷面

【注意】[2] この音は我が國の方言には存在してゐるけれども、中央の言葉には無い。それ故、この音は、[ɛ] [ɔ] [ʌ] 及び [ə] と並んで、我々には學びにくい音の一つと考へなければならぬ。例へば rat [ræt] で言ふと、[rat] や [ret] になり易いから注意を要する。

95. [æ] 音を示す文字は (1) a であるが、其他に (2) a(-e) (3) ai (4) ae の例がある。

(2) a(-e) :— have

(3) ai :— plaid [plæd] plait [plæt] (=pleat)

(4) ae :— Gaelic ['gælik]

【注意】 plaid には [pleid]、plait には [pleit *or* pli:t] Gaelic には ['geilik] の發音もある。

19

96.

part	art	card	cart	tart
start	star	lark	mark	dark
large	carp	barn	bar	bard
scar	park	spark	tar	farm

上に揭げた語の中に含まれてゐる母音は、既に 81 節に說いた can't の中の [ɑ:] である。此音の短い音即ち [ɑ] は、今日の標準英語では使用せられてゐない。今 [ɑ] を前節の [æ] と比較すると、此兩者は顎角の廣さに至つて

は殆ど伯仲してゐて [ɑ] の方がほんの尠し大きいと言へば言へる位であるが、舌の面が殆ど平らで、唯其背が心もち隆起してゐるに過ぎない。之に反して [æ] を發する時の舌は殆ど遍平ではあるが、其前面が稍や隆く背部が少しく低い事は、[ɑ] [æ] の二音を鏡に對して交互に發音して見ると知れる。

【注意】普通の辭書に [ɑ:] の短音として擧げてゐる語 (ask, ant, asp) の類 (96 節參照) はいづれも [ɑ:] として扱はれるのである。

97. [ɑ:] 音の示し方は普通に (1) ar であるが、其外に次の如き例がある。

(2) a(nt) :— ant [ɑ:nt] pant grant [grɑ:nt]
chant [tʃɑ:nt] can't [kɑ:nt] shan't [ʃɑ:nt]
a(sp) :— asp gasp clasp grasp [ɡrɑ:sp]
a(ft) :— shaft [ʃɑ:ft] craft draft staff [stɑ:f]
a(sk) :— ask [ɑ:sk] task mask [mɑ:sk]
a(st) :— past [pɑ:st] mast cast fast blast
a(ss) :— glass [ɡlɑ:s] mass [mɑ:s] pass brass
grass [ɡrɑ:s]
a(nce) :—chance [tʃɑ:ns] lance dance [dɑ:ns]
a(th) :— path [pɑ:θ]

(3) er :— clerk [klɑ:k] sergeant ['sɑ:dʒənt]
Derby ['dɑ:bi]

(4) au :— aunt [ɑ:nt] laugh draught [drɑ:ft]

(5) ah :— ah hurrah [hu'rɑ:]

(6) al :— alms [ɑ:mz] almond ['ɑ:mənd] calm
palm psalm half calf

(7) ear :— heart [hɑ:t] hearth [hɑ:θ]

(8) are :— are [ɑ:]

Fig. XIX [ɑ:] の口形

口形の外貌

口形の縱斷面

20

98. (1) pine wine dine line fine
pride bride slide wide chide
slide glide strike spite shine

上に掲げた語の中の母音は單純のものでなく、二音が複合して二重母音、發音記號 [ai] (=[a]+[i]) を成してゐる。末尾の [i] 音は既に 88 節に說いたものであるが、首めの母音は、一面は前節の [ɑ:] 音の短いものにも似てゐ、また一面は 94 節の [æ] 音にも似てゐる。要するに此兩音の中位を占め、兩方を兼ねた中間の舌の位置で出來る音で其發音記號は [a] である。

99. [ai] を示す爲に用ゐられる文字は普通は (1) i(-e) であるが、其他にも次の如き例がある。

(2) igh :— high thigh [θai] sigh flight bright
tight might night light right slight

(3) i :— kind find bind mind wind grind
bind blind rind
mild child wild
Christ [kraist] pint [paint] ninth
I [ɑi] whilst [ʍailst] climb [klaim]

(4) y :— my thy spy fly fry try cry by
wry [rai] awry [ə'rɑi]

(5) ie :— die pie dies [daiz] tie flies [flaiz]

(6) eigh(t) :—height [hait]

(7) is(le) :—isle [ail]

(8) ais(le) :—aisle [ail]

(9) uy :— buy [bai]

(10) ye :— dye [dai]

(11) y(-e) :—type style

(12) ic(t) :—indict [in'dait]

100. fire wire tire dire sire

上に掲げた語の中の母音は、前節に說いた [ai] の末尾に曖昧音 [ə] の添はつたもので、[ə] 音の添はつた結果 [ai] の長さが大に減じ、其上に [ai] の [i] の舌の位置が低くされるのである。

101. [aiə] (三種の母音が相集つて出來る音なるが故に斯くの如き音を、三重母音と云ふ) を示す文字は普通は (1) ire であるが、其他に次の如き例もある。

(2) yre :— lyre [laiə] tyre

(3) oir :— choir [kwaiə]

【注意】 defier [di'faiə], liar ['laiə] の如く [ai] と [ə] の判然獨立の音節に言ひ分けられるものは三重母音ではない。92 節【注意】[2] 參照。

102. (1) sound count found south couch
noun cloud proud pound bound
(2) how now cow bow (*v.*) owl
vow plow town crown howl

上に揭げた語の中に含まれてゐる母音、發音記號 [au] =(a+u) を調べて見るこ、其首めの [a] 音は前節の [ai] のそれこ同じものである。また其末尾の [u] 音は 88 節の例文中の cured [kjuəd] endured [indjuəd] の中にも顯はれ、また後段 §24 に於いても、更に今一度說くべき [u] こ同じ性質の音で、稍低い舌の位置で出來る音である。此 [u] の例へば put [put] なごの [u] に對する關係は、既出の [ai] の [i] (88 節參照) の [i] に對する關係こ同樣である事を記憶すべきである。

103. [au] を示すには普通に (1) ou (2) ow が用ゐられるが、其他にも次の如き例がある。

(3) ough :— plough [plau] bough [bau]
drought [draut]
(4) eo :— Macleod [mək'laud]

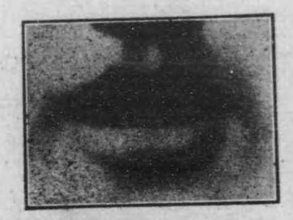
【注意】 drought はまた [drɔ:t] こも發音される。

104. (1) our hour sour flour
(2) tower power shower flower

上に揭げた語の中には前節の [au] の音が含まれてゐるが、末尾の [ə] 音の爲に長さが大に減ぜられ、且つ [u] の舌の高さがやゝ低くなる。此三重母音 [auə] を既に說いた [aiə] (100 節參照) に比較して互に其異同を考へ合せるこ利益が多い。

Fig. XX [a] の口形

口形の外貌



口形の縱斷面

(これから [ai], [aiə], [au], [auə] が生れる)

【注意】[1] power [pɑuə] bower [bauə] の如く [au] と [ə] とが判然と區別して言ひ分けられる場合には三重母音は成り立たぬ。

【注意】[2] [a] 音の記號の代りには [ɑ:] の短いものを代へて用ひ、[ɑi], [ɑiə], [ɑu], [ɑuə] として之を扱つても、敢て差支はない。

21

105. (1) hot lot spot stop clock
lock frock flock crop block
shop chop nod cod plot

上に掲げた語の中の母音を發する際には、顎角は [ɑ] の時よりも狹く [ɛ] を發する時の其れに均しいが、舌の面が後方に於てやゝ隆起する點は [ɑ] に類似して、しかも、其程度は此よりも一層强く、また口角は互に近づかんとして唇は少しく圓みを帶びるのである。此音の發音記號は [ɔ] である。(此記號は、後に說く狹き [o] と區別せんが爲に、開いた o といふ意で、c の字を顚倒して之を作つたのである)。

【注意】米國では [ɔ] を [ɑ] 又は [a] に代へて、例へば Oxford ['ɔksfəd] を ['aksfəd] と言ふ習はしがある。

106. [ɔ] を示す爲の文字は普通には (1) o であるが、其他にも

(2) (w)(u)a :—wash want quash [kwɔʃ] squash
quarrel ['kwɔrəl] squalid
quality ['kwɔliti] quantity [kwɔntiti]
(3) ach :— yacht [jɔt]
(4) au :— laurel ['lɔrəl] sausage ['sɔsidʒ]
(5) ou :— hough [hɔk] lough [lɔk *or* lɔx]
Gloucester [glɔstə]
(6) ow :— knowledge ['nɔlidʒ] acknowledge
(7) oh :— John
(8) o(-e) :— gone [gɔn] shone [ʃɔn]

【注意】because [bikɔ:z] はまた [bi'kɔz] とも發音す。

107. (1) draw saw craw straw jaw
dawn lawn raw lawn claw
(2) sauce fraud vault fault clause
pause cause gauze Gaul
(3) fork pork sort short sport
cord lord fort stork scorch

上に掲げた語の中の母音は前節の [ɔ] 音を引延べたものと酷似してゐるので、其發音記號も [ɔ:] とするが、[ɔ:] は [ɔ] と違つて狹母音である。

【注意】標準英語では draw の aw も sauce の au も fork や lord の or も全く同じで無差別に發音せられるが、人に依つては

fork や lord の樣に其綴字に r の字を含んでゐる [ɔ:] の音をは [ɔ'ə] と發音する。例へは laud を [lɔ:d] sawed を [sɔ:d] と言ひ lord を [lɔ'ədˌ] sword を [sɔ'ədˌ] と言ふ。

108. [ɔ:] を示す書き方は、普通は (1) aw (2) au (3) or (+父音) であるが、其他に次の如き例がある。

(4) a(ll) :— all wall call ball tall small

a(l) :— bald [bɔ:ld] halt [hɔ:lt]

appal walnut always

almanac ['ɔ:lmənæk *or* 'ɔl-] almighty

already although withal [wi'ðɔ:l]

(5) al(k) :— talk walk chalk

(6) (w)ar :— ward [wɔ:d] warm swarm

wharf [wɔ:f] quarter ['kwɔ:tə]

(7) our :— court course mourn [mɔ:n] source

(8) oa :— broad [brɔ:d] abroad

(9) oar :— board [bɔ:d] aboard

(10) augh :— aught naught

(11) ough :— ought [ɔ:t] thought bought [bɔ:t]

fought sought brought wrought

【注意】[1] loss, froth, cross, soft, cloth, moss, off, coffee, office の o の字の示す母音は、[ɔ] ともまた [ɔ:] とも發音する。

【注意】[2] daunt, flaunt, gaunt, haunch, haunt, jaunt, launch,

slaunch, taunt, vaunt, wrath の母音は [ɔ:] が普通であるが、また [ɑ:] とも發音する。

109. (1) shore store ore tore lore

snore more yore sore score

上に掲げた語の中の母音は、今日の標準英語では、前節の [ɔ:] の音と同一に發音せられる傾向があるが、shore, lore の如く [ɔ:] の音が音節の終末に來てゐる時は、之を short, lord の如く父音の前に在る時と區別して [ɔə] (一層精密に書けば [ɔ'ə]) と發音する方が普通と考へられてゐる。但し此種の發音がいつも其綴りの中に r の字を含んでゐることを記憶すべきである。

【注意】 grower ['grouə], goer ['gouə] の如く [ou] と [ə] とが判然區別して言ひ分けられるものは三重母音ではない。

110. [ɔə] を示す文字は、普通に (1) o(re) であるが、其他に次の如き例もある。

(2) or :— for

(3) oar :— oar [ɔə] boar roar

(4) oor :— door floor

(5) our :— pour [pɔə] four

111. (1) boy toy soy coy Troy

(2) soil boil toil coil coin

Fig. XXI [ɔ] の口形

口形の外貌

口形の縱斷面

（これから [ɔ:], [ɔə], [ɔi] が生れる）

上に掲げた語の中の母音は其初めの音が [ɔ] 音で末尾の音が [ei], [ai] に於て既に見た二重母音の末尾の [i] の音であるが、此 [ɔ] は細かに調べると hot, pond などの [ɔ] でもないし、また law, fork の [ɔ:] とも違ふ。要するに此二者の中間の音と心得べきで、其發音記號は正確に

は [ɔ'i] とすべきだが、普通の場合には便宜上 [ɔi] と書いてすませる。

【注意】[1] 本邦人は boy, toy の類を [bɔ:i], [tɔ:i] の如くに長く發音する風があるが、正しくは [bɔ'i], [tɔ'i] ゆゑ半長音以上に伸べて言はぬ樣心すべきである。

【注意】[2] employer [im'plɔiə], destroyer [dis'trɔiə] などに於ての如く此 [ɔi] に更に [ə] が加はつて三重母音を成すことがある。

22

112. (1)

cut	nut	sun	pun	hut
rub	bud	tub	cub	dub
jug	drum	skull	jump	gun
pump	punch	puck	suck	gum

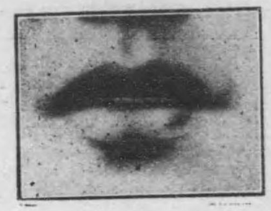
上に掲げた語の中の母音は大體 [ɔ] 音に似てはゐるが、之を發音する際に舌の後部が少しく隆くなり、或る時は其外部も亦上げられるので、結果が [ɑ] と前に說いた [ʌ] との中間の狹母音、發音記號 [ʌ] (v 即ち古の u の字を顚倒したもの。) となる。

【注意】[1] 此音の記號は a の字を倒にして [ɐ] を使ふ人もある。

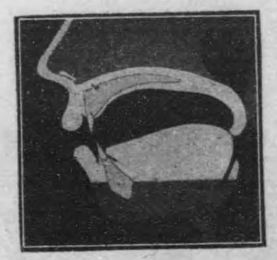
【注意】[2] この音は我國の「ア」に、少しく「オ」を加味した音に聞える。之を [a] 又は [ɑ] と混同したり、或は [o] や [ɔ] と混同したりしてはならぬ。

Fig. XXII [ʌ] の口形

口形の外貌



形の縱斷面



113. [ʌ] 音を示す文字は普通には (1) u であるが、他に次の如き例がある。

(2) oo :— blood [blʌd] flood

(3) oe :— does [dʌz]

(4) o :— money [ˈmʌni] honey [ˈhʌni]
London [ˈlʌndən] comfort [ˈkʌmfət]

company [ˈkʌmpəni] above brother
mother nothing colour dozen [ˈdʌzn]

(5) ou :— enough [iˈnʌf] courage nourish [ˈnʌriʃ]
double couple southern [ˈsʌðən]
cousin [ˈkʌzn]

23

114. (1) hope robe rope sole yoke
tone stone whole mole stove

(2) goat oak road coal boat
toad toast roast boast load

上に掲げた語の中の母音を 107 節に說いた [ɔ:] の音に比較して見ると、此音は [ɔ:] の如く一樣でなく、其末端が一層高度の合口作用で作られる爲、音尾が how や south の [au] の [u] に似た音に變つて行つてゐる。また其首めの音も [ɔ] の樣に廣い口で出來るのでなく、其れより遙かに顎角を狹くし、舌を高くして作られる音で、此音の全部を發音記號で示すと [ou] となる。共に合口の廣母音である。

【注意】 mower [mouə] や goer に於ての如く、此 [ou] には更に [ə] が加はつて三重母音を成す事がある。

115. [ou] 音の示し方は、普通には (1) o(-e) (2) oa であるが、其他にも次の如き例がある。

(3) ow :— crow blow glow glown growth own throw know mow [mou] strow low bow (*n.*) [bou] snow

(4) o :— go [gou] no [nou] so [sou] post [poust] host most [moust] ghost [goust] roll [roul] toll [toul] stroll bolt [boult] old [ould] gold sold told gross [grous] both [bouθ] quoth [kwouθ] comb [koum] wroth [rouθ] O (*interj.*) rogue [roug] vogue [voug] don't [dount] won't [wount] wont [wount]

(5) oe :— foe toe woe hoe

(6) oh :— oh [ou]

(7) ol :— folk [fouk] yolk [jouk]

(8) oo :— brooch [broutʃ]

(9) ou :— soul mould [mould]

(10) ew :— sew [sou] shew [ʃou]

(11) eau :— beau [bou]

(12) ough :—though [ðou]

(13) owe :— owe

(14) eo :— yoeman [joumən]

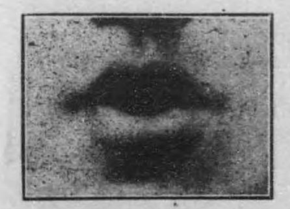
(15) og :— Cologne [kə'loun]

(16) aut :— hautboy [houbɔi]

【注意】 wont を [wʌnt] と發音することは、稍や舊式と認められてゐる。[ou] を「オー」又は「オオ」と發音するのは [ei] を

Fig. XXIII [o] の口形

口形の外貌



口形の縱斷面

(これから [ou] が生れる)

「エー」又は「エエ」とすると同じく、注意して避けねばならぬ。

116. 英國の標準語では、我が「ォ」音に對する短い [o] は、有るはあつても、極めて稀に外、用ゐてゐない。即ちこの音は、前節の [ou] の前半となつて多く現はれるので、單獨には、その [ou] が輕く發音される樣な位置にある爲 [o] に類似した音に言ひ崩される場合である。例、

protect [pro'tekt], window ['windo], obey [o'bei]

24

117. (1) look took book good wood
cook soot shoot hook wool

上に掲げた語に就いて其中に含まれてゐる母音を調べて見ると、此音、發音記號 [u] (常の u 文字と同一形) は後、廣、合、口の母音であることが知れる。此音は普通には (1) oo の字で書かれるが、其他には次の如き例もある。

(2) u :— put bull put full push
butcher ['butʃə] cushion ['kuʃən]
pulpit ['pulpit] cuckoo ['kuku:]

(3) o :— wolf [wulf] woman Wolsey ['wulzi]

(4) oul :— could should would

(5) or :— worsted ['wustid] Worcester ['wustə]

【注意】日本語の「ウ」は、英語の [u] ほど唇を圓く搾めない。

118. (1) moon noon soon fool cool
doom boot root roost spoon

上に掲げた語の中の母音、發音記號 [u:] (=[u+:]) は前節の [u] の長い音と見て差支ないのであるが、精しく言へば、[u:] は狹母音で、且つ [u] よりも合口の度が一層強く、其末尾に至つて益々其傾があり、人によつては之を [u] に始めて父音の [w] で結ぶ [uw] と見る位で、[i:] [ij] と關係を同じうしてゐる。(82 節參照)

119. [u:] を示す書き方は普通には [u] の場合と同じく (1) oo であるが、其他にも、次の如き例がある。

(2) o :— two whom tomb [tu:m]

(3) oe :— shoe

(4) ue :— true blue [blu:] clue [klu:]

(5) u(-e) :—rule rude flute [flu:t]

(6) ou :— youth wound (*n.*) group soup
route [ru:t]

(7) ui :— fruit juice [dʒu:s]

(8) ew :— chew [tʃu:] few yew [ju:]

(9) ough :—through

(10) o(-e) :—move prove

【注意】[1] [uː] 音を (1) u (2) ue (3) ew (4) ui の文字で示す場合に、其前に更に [j] 音を加へて [juː] と發音する時と、其まゝ [uː] とする時とがある。其區別を定める規則は、次の通りである。

(1) [r] [ʃ] [ʒ] [j] 又は其前に他の父音ある [l] の次に來る時は [uː] とし (例 rule, chew [tʃuː], June [dʒuːn], duke [djuːk], blue)

(2) 其他の場合には [juː] とする。

【注意】[2] new は [njuː] と讀む、[nuː] ではない。

120. (1) lure pure cure sure

上の語中に含まれてゐる母音(發音記號 [uə]、精しくは [uˑə]) は [uː] と同性質ではあるが、[ə] 音の爲に其長さが半長に成つてゐる點は、他の長母音で [ə] に伴はれたものと同例である。此音を示す書き方は、普通は (1) u(-e) であるが、其他に次の如き例がある。

(2) oor :— poor [puə]

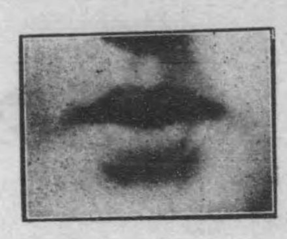
(3) our :— tour [tuə] your [juə]

【注意】[1] ure と云ふ綴りで終つてゐる語の其部分が [juə] と發音せられまた [uə] と成る其區別を掌る規則は前節の【注意】[1] に述べたもの (119 節注意[1]) と同一である。

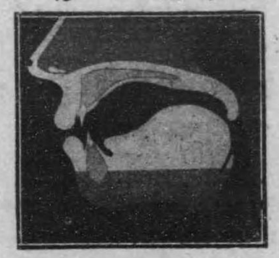
【注意】[2] 教育あるロンドン人の間に your [juə] を [jɔə] と(更に進んでは [jɔː] と) 發音する傾がある。これは [u] 音では舌の局部の隆起がない爲である。然し [juə] が正しい形である。

Fig. XXIV [u] の口形

口形の外貌



口形の縦斷面



(これから [uː], [uə] が生れる)

25

121. air fire hour shore cure

上の語の末尾の音は既に 83 節に於て之を略說したのであるが、更に之を精しく述べて見ると、此 [ə] といふ音は、

[ɛ] 音と [ɔ] 音との舌の位置を混淆して發した中間の開口の廣母音で、此音を得る爲には [ɔ] 音を發しながら唇と顎角を其儘に舌の位置のみを次第に [ɛ] のそれの方へ近づけ曖昧混化の音に達しようと試みるがよろしい。この音は、獨立した存在を有つてゐない。或る母音が無氣力に發音された場合に、墮落してこの音を生じ易いのである。例へば opinion, November などいふ時、力の込められない部分が變じて [ə'pinijən] (又は [o'pinjən]) となり、[nə'vembə] (又は [no'vembə]) となるのである。

122. 此音は一音節の語に於ては常に末端の (1) r 又は (2) re で示されてゐる。

【注意】[ə] は弱母音(86 節參照) としてのみ用ゐられる。卽、[i] [u] [ɔ] [ɛ] の後について [iə], [ɑiə], [uə], [ɑuə], [ɔə], [ɛə] となるのである。

122. (1)	term	verb	verse	jerk	herb
	germ	perch	stern	fern	wert
(2)	bird	stir	dirt	shirt	whirl
	fir	thirst	first	girl	girth
(3)	curl	purse	surf	burn	burst
	curse	nurse	spur	church	Turk

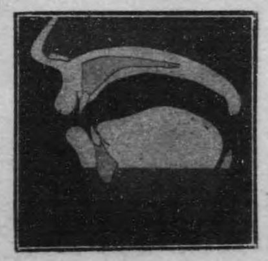
上に掲げた語の中の母音、發音記號 [ə:] (=[ə+:]) は前節の [ə] 音と略ほ同一の音であるが、其、常に强母音としてのみ使はれることゝ、其狹母音であると云ふ點が大に [ə] と異つてゐる。

【注意】[1] 英國の北部及び西部の人、及び米國人の中には [ə:] を發する際、それが e+r, i+r, u+r の樣に、母音 +r でなつてゐる時は舌の前面を上に向けて强く內へ捲く傾がある。また [ə:] を [əi] と發音する人も米國婦人などの間に、往々認められるが、いづれも方言であつて標準語では之を採らない。

Fig. XXV [ə] [ə:] の口形

口形の外貌

口形の縱斷面



【注意】[2] girl と云ふ語は [gə:l] と發音せられるのが常であるが教育ある人が之を [geəl] [giəl] 中には [gɛəl] とする人も時にある。

123. この [ə:] 音は普通 (1) er (2) ir (3) ur でかき表はされるが、別に次のやうな綴りでも表はされる。例。

(4) or :— word [wə:d] Wordsworth ['wə:zdzwəθ]
worship ['wə:ʃip]
(5) our :— courtesy ['kə:tisi] journal ['dʒə:nəl]
(6) eur :— amateur [æmə'tə:]
(7) ear :— heard [hə:d] earnest ['ə:nist]
(8) yr :— myrtle [mə:tl]
(9) olo :— colonel ['kə:nəl]

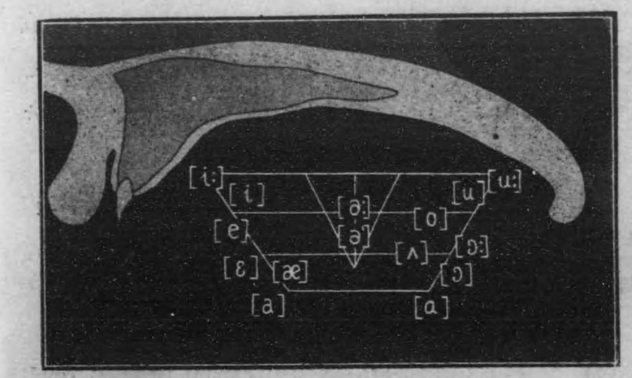
124. 今まで說いた所で、英國の標準語に顯れる普通の母音は一と通り述べ了つたのであるが、其全體をば 81 節

	前母音	混成母音	後母音
合	[i:] [i]		[u:] [u]
中	[ei] [e] [ɛ(ə)]	[ə:] [ə]	[o(u)] [ʌ] [ɔ:]
開	[æ] [a(i)]		[ɔ] [ɑ]

に掲げた形式の下に配列して見ると、凡そ次の通りになる。別にこれを口中に配置した Fig. XXVI を參照。

即、懸壅垂を咽喉の壁に當てゝ、空氣が鼻腔へ漏れない樣にしておいて、こゑを口内に響かせると、口腔の樣々の形につれて、種々の母音が出來る。舌を殆ど平にして、口を大きく開けた時の音が [ɑ] [a] で、それを出發點として、口を次第に閉ぢ、摩擦の音の出ぬ範圍内で、舌の前部

Fig. XXVI 母音配列圖



を、上顎の天井の前部へと近づけるにつれ、[æ] [ɛ] [e] の音が聞える樣になり、更に進むと [i] の音が現れる。この際、唇は [a] [ɑ] の丸い大きい形から、平たい四の字形となり、口角が左右へ擴がり氣味になる。之に反して [a

[ɑ] が [ɔ] [ʌ] [o] を經て、[u] に移つて行く時には、口が次第に閉ぢられる事は、前と同樣であるが、舌は、その後部を上顎の天井の後部へと進めて行くばかりか、それと同時に、唇は次等につぼめられ、且つ多少突き出されるのである。口の開きも、舌の高さも、またその前後の位置も、唇の形も、共に中性で、明瞭を缺く時に出來る母音が [ə] である。

27

125. 以上の發音記號を用ゐて、英語の發音を寫す、或ひは普通の字體で書いてある英語を、書き直す、これを發音轉寫といふ。先づ單語の發音轉寫に於ては、次の條々を注意するがよろしい。

(1) 發音轉寫は、一音一記號主義であるから、如何に複雜な綴りでも、發音通りに容赦なく書きなほすのである。例、

handsome ['hænsəm]　rapsbury ['rɑ:zbəri]

(2) 發音轉寫では、原の語中の capital letter と small letter との區別を認めない。悉く小文字で書く。例、

London ['lʌndn]　McDonald [mək'dɔnld]

(3) 發音轉寫に於ける accent のつけ方は、その accent のある syllable の前につけるのが、萬國發音學協會の規約

である。例、

pencil ['pensl]　omit [o'mit]

(4) 發音記號では略語のしるしの．や、領格のしるしの ' などは認めない。例、

Mr. ['mistə]

the boys' books [ðə bɔiz buks]=the boy's books

126. 二語以上が轉寫される場合には、前節に述べた單語のに就ての注意のほか、次のやうな事柄にも心すべきである。

(1) 發音の上では、言語は、一語一語でばらばらに切れてはゐない。必ず續いてゐる。例へば good morning は、文字の上では good と morning の二語であるが、發音の實際に於ては [gudmɔ:niŋ] で離れてはゐない筈である。然し轉寫に於ては、元の語の並べ方、切り方に應じて、一々切るのが常である。例、

How are you? [hau ɑ: ju:?]

(2) Capital letter や apostrophe や省略符は之を認めないのに、comma や period, quotation marks その他すべての punctuation marks は之を存する。

【注意】發音記號の書き方は、西洋の發音學者の示した例によると、只普通の語のやうに、書き流してあるやうであるが、我々は、普通の語と區別する爲に [　] の中に入れ、且つ又必ず、記號は活字體で書いて、筆記體を用ゐない事に定めるがよからう。

下編

連音

28

127. 今までは父音及び母音の各個をば獨立の單音として取扱ひ、一連の語の發音の中にあるとき、それがどんな變化を受けるかについては、多く言及しなかつた。やうやく、61 節に於て、far_away の如き場合に、r が次の a と合して [fɑ:rəwei] の如くなり、Here_is の re は [ə] として一度用をなした上、次の is と合して [hiə riz] のやうに讀まるゝ事を述べた位であつたが、この編に於ては、さういふ現象を、もつと總括的に述べて見ることにした。かゝる、音と音との關係は、一語の中にもあるし二語以上連つた場合にも起り得る。又、一方に於ては、80 節に於て一寸述べて置いたやうに、一文中で、ある語には强勢があり、ある語には强勢がない、この强勢で讀むか弱勢で讀むかが、語の發音を變化させるに亦與つて大に力がある。これも連音の部に於て述ぶべき事である。

128. 一つの音が近所にある他の音の爲に影響されて變化したり消えたりする事があるが、この現象をば、發音學

者は同化と言つてゐる。音の同化は種々な場合に現はれる。次に實例を示す。

(1) dogs と cats といふ二語を比較して見るに、同じ複數の語尾 -s をつけたものでありながら、dogs の方は [dɔgz] と讀み、cats の方は [kæts] と讀む。即、前の s は濁音で、後の s は清音である。これは何故であるか。これが、音の同化の現象の一つで dogs の場合には、[g] 音の持つてゐるこゑの影響をうけて s までが濁つて [z] になるのである。この現象は複數の時ばかりでなく、三人稱單數の動詞につける s や領格の動詞につける s に於ても皆同樣である。これ等は、前の音が後に來る音に影響を及ぼす例である。

(2) sit down を發音するに、我々は屢々、[sit daun] とやうには言はないで、實は [sidaun] となつて續き、sit の [t] 音は消えてしまふのである。これは、前と同じ現象ながら、只 (1) とはあべこべに、後に來る [d] 音のこゑが、前に來る [t] 音まで影響して、これを [d] にしてしまひ、[siddaun] が約つて [sidaun] になつたのである。

以上は皆、こゑがいきに影響する例である。そして又、影響される音は、全部的に影響をうけて、すつかり同化してしまう。然るに次の例に於ては、いきの方がこゑを同化し、しかもその同化は一部分である。

(3) small sneer place sweet tree pew

これ等の語を發音しながら、よく注意して聞いてゐると small は [smɔ:l] ではなくて、[m] 音は、その前半に於て、いきで發せられ、[sm̥mɔ:l] となる事が聞かれるであらう。sneer も [sniə] ではなくて [sn̥niə] となる。其他 [pl̥leis] [sʌwi:t] [tr̥ri:] [pçju:] となるのである。人によつては、全部同化させて、[sm̥ɔ:l], [sn̥iə], [pl̥eis], [sʌi:t], [tr̥ri:], [pçuə] と言つてしまう人もある位である。これはつまり、[m], [n], [l], [r], [w], [j] 音は、その前後に清音——即ちいきで發せらるゝ音があると、その影響をうけて、元來は濁音——即ちこゑで發せらるゝ音でありながら、その前半か後半かが清音化するのである。即ち、これらの音のあとに清音がある爲に同化せらるゝ例には、lamp [læmm̥p] tense [tenn̥s] の如きがある。

129. (4) actual, issue, immediate, glazier.

この四語を發するに、正しくは、

['æktjuəl], ['isju:], [i'mi:djət], ['gleizjə]

であるべき所であるが、普通の會話では、

['æktʃəl], ['iʃu:], [i'mi:dʒet], ['gleiʒə]

となる。これは即、[tj], [sj], [dj], [zj] が、口の中の發音機關を嚴格に保持せずに發音する爲に、段々その機關がすこし別のらくな所できまつて、その音を出さうとする。つ

まり、音を墮落させてしまふ。その結果が [tj] は [tʃ], [sj] は [ʃ], [dj] は [dʒ], [zj] は [ʒ] になつて來るのである。これは詳しくいふと [tj] が [tʃ] になるのは、[t] の時の口形と [j] の時の口形とが兩方から歩み合つて、[tʃ] といふ音に妥協して合一したのだといふわけであるから、双方が一音に同化した例だといへる。

(5) key, cot; panel, month; king, queen;

この四語を二語づゝ比較して讀んで見ると、耳のよい人は、[ki:], [kɔt] に於ては、[k] 音が相異し、[pænl], [mʌnθ] に於ては [n] 音が相違する事を發見するであらう。即、key の [k] は、cot の [k] よりも、音の出される點が前部にある。month の [n] は前齒の上はぐきの裏で出され、panel の [n] は軟口蓋の前部で出される。これは、やはり音の同化の爲の墮落で、[ki:] に於ては [k] が [i:] の影響をうけて、すこし前部で形成せられるのである。[mʌnθ] では [θ] が上齒の裏手で形成されるので、もすこし奥で造らるべき [n] までが、そこで便宜一緒に造られてしまふのである。

第三の king, queen の二語に於ても、king の [k] は正確であるが queen の [k] は、[kwi:n] の w の影響で唇を圓くつぼめた處で發せらるゝ。これと同じ例は comfort [kʌm̥fət] の [m] は次の [f] の爲に [f] と同樣、上唇と

下齒との間から生れるし、open [oupn] は [oupm] と訛る。皆同じ理由からである。

(6) horseshoe, is she; bacon, congress; clean gloves;

この語句の中第一の二つを發音して見ると、正しくは [hɔ:sʃu:], [izʃi:] とあるべきだが、心を許して發音する會話の際などには、[hɔ:ʃʃu:] [iʒʃi:] となつてゐる事を知るであらう。これは (5) よりも更に激しい口形の變位の爲で、shoe の [ʃ], she の [ʃ] が、その前の horse の [s], is の [z] の口形に影響して [ʃ] に同化してしまふのである。

第二の二つを發音すると耳のさとい人達は、それが [beikn] でもあるが又、[beikŋ] ともなり、[kɔngres] ではなくて [kɔŋgres] である事を感ずる。これもやはり同じ現象で bacon では c の [k] 音が [n] の發音さるゝ位置を動かして [ŋ] に變じさせ、congress では [g] が前の n の發音さるゝ位置を動かして [ŋ] にするのである。

第三の clean gloves は [kli:n glʌvz] がよい。然しある人は之を [tli:n dlʌvz] と發音する事がある。これはわるいのである。然しさういふ誤が生ずるのも cl- の [l] が c の [k] 音を動かして l の發せらるゝ口形に近い [t] としてしまひ、[g] が同樣に [d] になつたもので、是亦やは同化の例である。

以上の (4) (5) (6) の例は、(1) (2) (3) が聲の隣りあつて生ずる同化だと言へば、これは舌の位置によつて生ずる同化だと言つてよろしい。

130. (7) Kindness には [kaindnis] といふ發音もあるが、略體では [kainnis] とも言ふ。grandmother は [grændmʌðə] でもあるが、[grænmʌðə] とも崩す。この現象は、[d] が前後の [n] [m] といふ鼻音のために鼻音化されて [n] になるので、やはり同化の一現象である。これは、(1) (2) (3) や (4) (5) (6) とも異ひ、氣息の通路の變更による同化現象である。

以上が普通、音の同化として說く處のものである。

29

131. been deer goal pin tear coat

これを發音して見ると、[bin] [diə] [goul] に較べて [pin] [tiə] [kout] は、[p], [t], [k] のあとに [b], [d], [g] のあとにはない或る餘裕があつて、一寸氣息が漏れてゐる音を聽く事が出來る。これは、[p, t, k] のやうな清音の破裂音に於て現はれる現象で、これらが母音と續くと、實際はその破裂の音を加へて [phin] [thiə] [khout] のやうになるのである。濁音の破裂音と母音との間にはかういふ現象はない。

132. cap, cab; cat, kid; rock, log.

この、破裂音を語尾にもつ二語づゝを發音するこ、清音の破裂音 [p], [t], [k] にはやはりその音の末尾に、[h] 音がついて [kæph], [kæth], [lɔkh] こなるのが聞えるが、[b] [d], [g] 音のあこには、同じく [h] も聞えるが、また [ə] 音がつくのがわかる。即、[kæbh], [kidh], [lɔgh] 又は [kæbə], [kidə], [lɔgə] のやうになるのである。かく濁音の破裂音のあこには [h] 音も生れるが [ə] 音がつゞいて生れるこいふここが、前節の、[bin], [diə], [goul] の、即、濁音の破裂音＋母音の方だけは [bhin], [dhiə], [ghoul] にならない事の説明こなるのである。

以上は破裂音の性質こして注意すべき個條である。

30

133. attempt　　empty

かういふ語は [ətempt], [empti] こ發音してもよいが、[p] 音は之を取つてしまつて、[ətemt] [emti] こするもよろしい。この現象は [p] [t] 等いふ破裂音の性質から起る。即、音にはすべて入、中、出の三つの過程があつて成立する事は述べて置いたが (3 節參照)、破裂音に於ては、入こは、氣息を止める事であり、中こは氣息を休止する事、

出こは、氣息の通路を開く事である。こころが上の樣な場合で破裂音が他の音に挾まれてゐる場合には、例へば [ətempt] のやうな時には、[p] の入は [m] の出が兼ね、[p] の出は [t] の入が兼ねる。すなはち殘つた中は、音の休止の場合である。そこで結句は [p] は氣息の止められてゐる間の、音響のない時間を示す、空な文字に過ぎないのである。だから、[p] 音は消えてなくなるのである。この現象は § 29 に述べた現象こ共に破裂音の持つてゐる特殊な性質こして、も少し詳しく説明する必要がある。

134. act [ækt]

この發音でよく注意してゐるこ、[ækt] の [k] はやはり破裂音を出さないで、只 [æ] の出の折に [k] に似た口形をするばかりで、あこは音を休止させてゐるのである。これは即、前節に述べたこ同じ理由からであつて、empty の [pt] の場合こ同樣、清音の破裂音が語の中で重なつた場合の音の休止である。次に、

begged [begd]

で見るこ、これは、今の [kt] を只濁音にかへただけで [gd] の [g] のこころには、やはり、口形を [g] に直したまま音の休止があるのみである。

【注意】清音の破裂音は中の休止にちつこも音響を出さないが、この場合の如く濁音の中の休止には、いくらかこゑが漏れるのが常である。

135. 同樣に、同種の清音の破裂音を重ねた、that time は [ðættaim]、同種の濁音の破裂音を重ねた red deer は [reddiə] であるが、この場合にも [tt] の初めの [t], [dd] の初めの [d] は、消えてしまふ。さうすると結句は [ðætaim] [rediə] と同じでありさうであるが、事實 [t] 音 [d] 音が一つしかない場合よりも、この方は音の休止が [t] [d] の前に含まれてゐるだけ、[ðæ] 音と [taim] 音との間、[re] と [diə] の間が長い。又その方が本當なのである。

136. 又同樣に清濁兩音を、重ねた場合、即、

that day [ðætdei]　　bedtime [bedtaim]

に於ても、破裂音の初めのもの [-td-] の [t] と [-dt-] の [d] とは破裂しないで、只音の休止が起り、前と同樣、音の長さを增すのである。この時注意すべきは、[ðætdei] では [d] の前半、[bedtaim] では [d] の後半が、[t] の影響で清音化され [ðætd̥dei] [bedd̥taim] となる事である。要するに empty, attempt に於て起つた現象は、すべての破裂音が重なる場合には常に間違ひなく起る現象である事がわかるであらう。

【注意】[1] この現象は又同樣に、破裂音と鼻音のつゞく時にも起り、topmoust [tɔpmoust] that night [ðætnait] に於ては [pm] [tn] の [p] と [m], [t] と [n] の關係は、破裂音の重なる場合と同じく、前の [p] [t] の音の破裂はやはり聞えない。

【注意】[2] これらを、破裂音が單獨にある時の性質から [ækhth], [begədə], [ðæthtaim], [redədiə], [ðæthdei], [bedətaim] に發音し [h] や [ə] を入れて讀むのは、よくない。演說をしたりする時に、明瞭の爲にさうする事はかまはないが。

31

137. cats, dogs

この二語の發音は、[kæts] [dɔgz] である事は、すでに前節で述べたが、[dɔgz] の z は、純粹の [z] でなく [s] の樣にも聽きなされるので、この發音は果して [s] か [z] かが問題にされる。これも、音の入、中、出について關係してゐるのである。即、普通 [z] の如き濁音の摩擦音は、こゑ——聲帶の振動を受けた氣息——によつて生ずるのであるが、その氣息の振動を、科學的正確に查べて見ると、[z] が語の入にある場合には、初めの半分ばかりは、實は振動がなくて、後半が濁音としての振動をうける。反對に出にある場合には、後半には、もう振動がない。即 zeal は [z̥zi:l] とやうに dogs は [dɔgz̥z̥] とやうに又は全く [dɔgz̥] と發音されるのである。これで問題の final-s の疑問も片付く譯で、語尾の s は、[z̥] の性質を持つてゐるのだから、全く濁音にしてしまつて、强いて [z]

音を徹底するのはよくないといふ事になる。

【注意】 これに似た現象は、前節で述べた破裂音にもあつて、破裂音が濁音の語頭に來る時は、その入がやゝ清音化され、語尾に來る時は、その出がやゝ清音化される。語の末尾を清音化するのはよくないが、語の末尾がさうなるのは自然である。卽、hold の如きは [houldə] ともなるが多く [houldh] となる。それが昂ずると、遂に、子音の次に破裂音があつて終る語の末尾の場合には、[hould̚] のやうに、大半清音化され、殆ど [t] に近くもなる。

32

138. 英語の音の長短には (1) 長 (2) 半 (3) 短の三通りがある。次にその區別を述べよう。

【注意】[1] 半をかりに [ˑ] で示す。

【注意】[2] 無聲父音とは清音の父音、有聲父音とは濁音の父音のことである。此節以下にその呼稱がある。

139. 先づ、母音について言ふこと:——

(い) 長母音(二重母音を含む) 卽 [iː], [ɑː], [ɔː], [uː], [əː] 等は、强勢のある音節では (1) 語の末尾又は (2) 有聲父音の前に現はれる。例、

(1) sea [siː] sir [səː] far [fɑː] high [hai]

(2) halve [hɑːv] lose [luːz] hide [haid]

(ろ) 長母音(二重母音を含む)も、(1) 無聲父音の前 (2) 弱勢の音節にあるとき、及び (3) 他の母音がつづく時には半になる。例、

(1) seat [siˑt] half [hɑˑf] loose [luˑs]

(2) linseed [ˈlinsiˑd] (3) deist [ˈdiˑist]

(は) 短母音卽、[i], [e], [æ], [ɔ], [ʌ], [u] は無聲父音の前にばかり現はれる。例、

cap [kæp] top [tɔp] lock [lɔk] push [puʃ] pit [pit]

let [let] cup [kʌp]

(に) 然し短母音も、次に有聲父音 (l, r を除く) が來ると、半になる。例、

pig [piˑg] love [lʌˑv] man [mæˑn] bad [bæˑd]

manners [bæˑnəz] carry [kæˑri]

【注意】 この最後の二例、[mænəz], [kæri] は、一體から言へば、[ə] や弱勢の [i] は常に短であるに係はず、かういふ語尾にある時には、すこし長く半にしてもかまはない。

140. 父音の場合には、

(い) 短母音の次にある父音で、語の末尾にあるものは、やゝ長くなる。この場合に父音が有聲のものである時には、その短母音までが相たづさへて半になる事は前に述べた通り。例、

sip [sipˑ] pluck [plʌkˑ] cat [kætˑ]

log [lɔ·g·] sob [sɔ·b·]

(ろ) 同じ音節の中で有聲父音を次に控へてゐる父音は長くなる。例、

lads [d·z] pens [n·z] calves [v·z] sobs [b·z]

hold [l·d] wind [n·d] change [n·dʒ] build [l·d]

【注意】 以上のうち 139 の (に) 及び 140 に述べたやうな細かな長半短の區別は、只心持の上での事で、それを意識的に實行しては誤りに陷る虞がある。

33

141. c*a*t p*i*g bu*ll* dog*s* ra*t*

これだけの語で、その横書してある部分の音響を比較して見るこ、はじめの母音 *a* [æ] は末尾の子音 [t] に較べて遙かに響きの量が廣く且つ強い。この響きの量の事を音幅こいふが、上の諸音を音幅によつて比較して並べて見るこ、

[æ]>[i]>[l]>[g]>[t]

こなる。

142. かやうに音には、それぞれ違つた固有の音幅がある。こころが音の連續の一性質こして、音幅の強いものは、それの弱いものを從へて一塊の音を成す。この一塊の

音を稱して一つの音節こいふ。音節を形成する丈けに強い音幅を持つてゐる音は母音である。それから [l] [m] [n] である。例へば cable では a こ l こは音節をなす力を持つてゐる。それで a は c を牽き付けて [kei] こいふ音節をなし、l は b を從へて [bl] こいふ音節をなす。その結果が即、cable [keibl] こいふ二音節の語である。

【注意】 二重母音 [ou] [au] 等は一音節であるが、三重母音 [auə] [aiə] は、一音節にも見られ、二音節にも見られる。

以上が音節の考の大體である。

34

143. book, boy, pencil, London, yesterday, dictionary

前節で述べた音節が一つで出來てゐる語は單音節の語、幾つか集つて出來てゐる語は複音節の語である。上の例の [buk], [bɔi] は前者で [pensəl] [lʌndən] は後者で二音節、[jestədi] こ [dikʃənəri] こは複音節で一は三音節他は四音節である。

144. ここに pencil や London を發音するに當つて、我我は、[pen] こ [səl] こを同一の强さでは發音しない。[pen] の方が [səl] よりも强い。[lʌn]>[dən] も同樣である。か

ういふ場合、[pen] や [lʌn] は、其語中にあつて、強勢のかゝつた語だと言はれる。 かやうな强勢は文章にもあつて、それはすでに、§ 14 の初めに於て一寸言及した處である。この强勢並に其反對の弱勢は、要するに、發聲の便宜の爲であるから dictionary のやうな語になると [dikʃənəri] は dik>ʃə>nə<ri のやうに强弱の程度が皆ちがつてゐる。然し實際上には我々は、只强勢と弱勢とを分ければよいので、若し必要なら、第二强勢を認める位にとゞまるのが普通である。 萬國發音學協會で使ふ强勢の記號は、['] で、その强勢のある音節の左肩上に示し、第二强勢は [ˌ] で、その音節の左脚に之を加へるのである。 例

animosity [ˌæni'mɔsiti]

145. 音節の强勢を持つてゐるものを强音節、然らざるものを弱音節と名けるならば、强音節のありかは、語によつて固有なものであるけれども、それは、時代の變化により、又意義の變化によつて、時に變化する。即 ally といふ語の如きは、もとは [ə'lai] であつたのが、今では、大戰以來ことに ['ælai] に變つて來た如きは前の例で、indecent といふ語を、只の不埒の意ならば [in'diːsənt] と讀み、不埒の意を强めて言ひ度い時は ['in'diːsənt] と讀んでよい如きである。

146. これに似た變化は文章中にもある事は、

I bought the dictionary yesterday.

などの、どれかの語に特に强勢を置いて讀むと、それに從つて文章の焦點が違つて現はれるにも知れる。 然し文章上力を込めることは、强勢といはないで之を强調と呼んだ方が區別上よろしい。

147. 普通の場合、文章では大抵、普通のよみ方といふものがあつて、それで一文の意味の普遍的解釋が行はれるのであるが、さういふ場合、如何なる文中にあつても必ず弱勢を取る輕い語といふものがある。 その語自身獨立した場合、又は、特殊の强勢ある場合の外、常には極めて隱微な發音を持つてゐる、語である。 即、普通の文中では、これは、心して讀み別けなければならない。 例へば接續詞の and の如きには、都合四つの形があつて、(1) [ænd] これは强勢のある時の重い形。 (2) [ənd] これは、母音の前にある時の輕い形。 (3) [ən] これは父音の前にある時の輕い形。(4) [n] 又は [m] これは、bread and butter 又は cup and saucer などいふ時の一番輕い形である。

148. さういふ輕い形をば、發音學では弱勢の語と名けてゐる。その變化は概ね次の通りである。

(1) 常の强母音が形をかへて弱母音 (多く [ə] 又は [i]) になる。

(2) 父音の前の母音が失はれる。(us [ʌs] が 's [s] ニなる類)

(3) 語頭の h が失はれる事 (文章の始に於ては例外であるが have [hæv] が 'ave [əv] になる類)

149. 次に主なる弱勢の語の變化の形を示さう。

語	(1) 强勢ある時	(2) 弱勢のとき	語	(1) 强勢ある時	(2) 弱勢のとき
a	ei	ə	from	frɔm	frəm
am	æm	əm, m	had	hæd	həd, əd, d
an	æn	ən	has	hæz	həz, əz, z
and	ænd	ənd,ən,n,m	have	hæv	həv, əv, v
are	ɑ:	ə	he	hi:	hi, i:, ɪ
as	æz	əz	her	hə:	hə, ə(:)
at	æt	ət	him	him	hɪm, ɪm
be	bi:	bi, bɪ	his	hiz	hɪz, ɪz
been	bi:n	bin, bɪn	is	iz	ɪz, z
can	kæn	kən, kn	me	mi:	mi
could	kud	kəd	must	mʌst	məst, məs
do	du:	də, d	nor	nɔ:	no, nə
does	dʌz	dəz	not	nɔt	nt
for	fɔ:	fə	of	ɔv	ov, əv, v

語	(1) 强勢ある時	(2) 弱勢のとき	語	(1) 强勢ある時	(2) 弱勢のとき
on	ɔn	on	their	ðɛə	ðə
or	ɔ:	o, ə	them	ðem	ðəm, əm
saint	seint	snt, sn	till	til	tɪl, tl
shall	ʃæl	ʃəl, ʃl	to	tu:	tu, tə
she	ʃi:	ʃi	us	ʌs	əs, s
should	ʃud	ʃəd, ʃd	was	wɔz	wəz
sir	sə:	sə	we	wi:	wɪ
some	sʌm	səm	were	{wɛə, wə:	wə
such	sʌtʃ	sətʃ	will	wil	əl, l
than	ðæn	ðən	you	ju:	ju, jə
that	ðæt	ðət	your	{ju:ə, jɔ:	jo, jə
the	ði:	ðə, ðɪ			

35

150. 文章は、語に別れて、各語は離れ離れになつてゐるが、これを口で述べる時は必しもさうでない。二語や三語が往々一いきに讀まれる。これは息を繼ぐ爲でもあるし、又意味の區切をはつきりさせる爲でもある。かういふ發音上の一ニ區切りをば、氣息の段落ニ名づける。

151. 次に一例を R. L. Stevenson の作「鎭魂の賦」に採つて、言語が氣息の段落に分れる有樣を示して見よう。

REQUIEM

Under the wide and starry sky,
Dig me grave and let me lie.
Glad did I live and gladly die,
And I laid me down with a will.

This be the verse you grave for me:
"Here he lies where he longed to be;
Home is the sailor, home from sea,
And the hunter home from the hill."

rekwiəm

ʌndəðə waidn stɑrɪ skai,
digmɪ ɡreivən letmɪ lai.
ɡlæddidailiv əŋɡlædlɪ dai,
əndaileidmɪ daun wɪðəwil,

ðisbɪðə vəːsju ɡreiv fəmiː:
"hiəriːlaiz ʍɛərɪːləɲd təbiː;
houmɪzðə seilə, houm frəmsiː,
ənðəhʌntə houm frəmðəhil."

36

152. Did you say "Yes"?
Yes, I did.

聲には調子がある。上の例を見ても初の文章の中の Yes と後の文中の Yes とは音の調子が違つてゐる事が解るであらう。この音の調子の變化を指して抑揚といふ。抑揚は、强勢や强調とは違ふ。强勢、强調は音の强弱である。抑揚は音の高低である。前者は音の强度で、後者は音の調子である。音の調子、即ち抑揚のあげさげは、主として有聲音、即、濁音が司る。無聲音、即、清音は殆ど關係しない。

【注意】母音はみな有聲音である。

153. Did you say "Yes"? の "Yes" は尻上りの調子である。之を昇調と呼び、Yes, I did の "Yes" は、[j] 音に力を入れて尻下りである。之を降調と言ふ。これらに對して、調子に初も終も上り下りのないのは平調である。これを使ふ場合は多くない。然し、「さうかしら」といふ樣な意味で Yes といふ時は、平調である。

かういふ種々の調子が、種々の意味を含んで用ゐ廻されて、會話の色合が成立つのである。話しぶりが生れるのである。

37

154. 以上に述べた事は、英語の發音法のほんの大體の說明であるが、兎に角これで一應その概要だけは述べる事が出來た。この大體から出發して、讀者諸君は今後益、この方面の研讀を積まれんことを希望する。その參考書としては、英語で書いたものばかりでも、隨分澤山あるが、さしあたりの座右の友には

D. Jones: *Pronunciation of English.* Cambridge University Press. (3s.)

が、手頃で宜しからうかと思ふ。また英語の發音の實寫を宗と示した書物では次の如きがある。就いて學ばれると發明する所が甚大であらうと信ずる。

D. Jones: *Phonetic Readings in English.*
Cambridge University Press. (3s. 6d.)

【注意】その他の主なる參考書は先づ次のやうなものであらう。

(1) 發音學

W. Ripman: *The Sounds of Spoken English* (revised edition.) Dent, London. 1914. (2s. 9d.)

H. Sweet: *The Sounds of English.*
Oxford University Press. (1s. 9d.)

H. E. Palmer: *A First Course in English Phonetics.*
Heffer, Cambridge. 1916. (2s. 6d.)

(2) 發音轉寫

W. Ripman: *Specimens of English* (revised edition.)
Dent, London. 1914. (1s. 6d.)

G. Noel-Armfield: *English Humour in Phonetic Transcript.* Heffer, Cambridge. 1914. (10d.)

———: *100 Poems for Children.*
Teubner, Leipzig. 1909. (2s.)

C. M. Rice: *Short English Poems for Repetition.*
Heffer, Cambridge. 1915. (10d.)

附　　錄

(一)　本書所用の發音記號の表

ɑ:	f*a*ther	['fɑ:ðə]
ai	dr*y*	[drai]
au	h*ow*	[hau]
æ	c*a*t	[kæt]
ʌ	b*u*t	[bʌt]
e	*e*nd	[end]
ei	*ei*ght	[eit]
ɛə	f*air*	[fɛə]
ə:	b*ir*d	[bə:d]
ə	*a*bove	[ə'bʌv]
i:	f*ie*ld	[fi:ld]
i	f*i*t	[fit]
ɪ	cit*y*	[sitɪ]
ou	*o*ld	[ould]
o	*o*'clock	[ok'lɔk]
ɔ:	*a*ll	[ɔ:l]
ɔ	r*o*ck	[rɔk]

u:	wh*o*	[hu:]
u	b*oo*k	[buk]
(ŋ̩)—m	*m*an	[mæn]
(ŋ̍)—n	*n*et	[net]
(ŋ̊)—ŋ	king	[kiŋ]
p—b	*p*u*b*lic	['pʌblik]
t—d	*t*en*d*	[tend]
k—g	*k*e*g*	[keg]
ʍ—w	*wh*ere*w*ith	['ʍɛəwið]
f—v	*f*e*v*er	['fi:və]
θ—ð	*th*ence*for*t*h*	['ðens'fɔ:θ]
(ɹ̩)—r	*r*ead	[ri:d]
(l̩)—l	*L*ondon	['lʌndn]
(ç)—j	*y*es	[jes]
h—	*h*at	[hæt]
s—z	*s*ie*s*e	[si:z]
ʃ—ʒ	*sh*ort mea*s*ure	[ʃɔ:t 'meʒə]

(二) いはゆる Webster 式符號と本書所用の發音記號との對照表

この舊式符號は我國で今まで行はれてゐる代表的なものとして、ある辭書から取つたものである。

*符は發音記號重出を示す。

(その一)

ā	[ei]	lāte	[leit]
ȧ	[i], [ə]	prefȧce	['prefis], [-fəs]
ạ	[ɔ:]	ạll	[ɔ:l]
ạ=ŏ	[ɔ]	wạs	[wɔz]
ä	[ɑ:]	fär	[fɑ:]
à	[ɑ:]*	àsk	[ɑ:sk]
â=ê	[ɛ]	câre	[kɛə]
ă	[æ]	măn	[mæn]
ạ	[ə]*	ạbout	[ə'baut]
ē=ī	[i:]	mē	[mi:]
ė	[i]*	rėmain	[ri'mein]
ê=â	[ɛ]*	thêre	[ðɛə]
ẽ=ī=ū	[ə:]	vẽrsion	['və:ʃn]
ē	[e]	tēn	[ten]
ẹ	[ə]*	momẹnt	['moumənt]
ēa=ē	[i:]	mēat	[mi:t]
ẽa=ẽ	[e]*	mẽant	[ment]
eâ=â	[ɛ]*	beâr	[bɛə]
ẽe=ē	[i:]	bẽef	[bi:f]
ẹi=ā	[ei]*	ẹight	[eit]
ẹy=ā	[ei]*	thẹy	[ðei]
eū=ū	[ju:]	neūter	['nju:tə]
ew=ū	[ju:]*	dew	[dju:]
ẽy=ē	[i:]*	kẽy	[ki:]
ī	[ai]	īce	[ais]
ĭ=ē	[i:]*	machĭne	[mə'ʃi:n]
ĭ	[i]*	ĭnk	[iŋk]
ĭ=ẽ=û	[ə:]*	bĭrd	[bə:d]

ō	[ou]	ōld	[ould]
ȯ	[o]	mȯlest	[mo'lest]
ọ=ōo	[u:]	mọve	[mu:v]
ọ=ŏŏ	[u]	wọlf	[wulf]
ȯȯ=ọ	[u:]*	mȯȯn	[mu:n]
ŏŏ	[u]*	bŏŏk	[buk]
ȯ	[ɔ:]*	shȯrt	[ʃɔ:t]
ŏ=ạ	[ɔ]*	pŏt	[pɔt]
oi	[ɔi]	oil	[ɔil]
ou	[au]	out	[aut]
ŏ=ŭ	[ʌ]*	son	[sʌn]
ọ	[ə]*	atọm	['ætəm]
-ous=ụs	[əs]	curious	['kjuərjəs]
ŏw=ō	[ou]*	sŏw	[sou]
oy=oi	[ɔi]	boy	[bɔi]
ū	[ju:]	ūse	[ju:s]
ŭ	[ju]	impŭdent	['impjudənt]
ụ=ọ=ōo	[u:]*	trụe	[tru:]
ụ=ọ=ŏo	[u]*	pụt	[put]
û=ĭ=ẽ	[ə:]*	fŭr	[fə:]
ŭ=ȯ	[ʌ]*	sŭn	[sʌn]
ụ	[ə]*	circụs	['sə:kəs]
ȳ=ī	[ai]*	bȳ	[bai]
ȳ	[i] [ĭ]*	citȳ	['sitĭ]
ȳ=ẽ	[ə:]*	mytle	['mə:tl]

【注意】 いはゆる Webster 式では、women の如きは符號のつけ方がなくて [wĭm'ẽn] と書き直してあらはす。さういふ例は他にもいくつかある。

(その二)

c=k	[k]	cry	[krai]
ç=s	[s]	façe	[feis]
ch	[tʃ]	much	[mʌtʃ]
ch=k	[k]*	chorus	['kɔ:rəs]
çh=sh	[ʃ]	çhaise	[ʃeiz]
-çi{al, an, ence}	[ʃ*{əl, ən, əns}	soçial	['souʃəl]
		musiçian	[mju'ziʃən]
		defiçience	[di'fiʃəns]

ent ous	ənt əs	deficient precious	[di'fiʃənt] ['preʃəs]
dge ḍ	[dʒ] [dz]	bridge birds	[bridʒ] [bəːdz]
ġ=j ġ eon ion eous ious gh	[dʒ]* [dʒ* ən, ən, əs, əs] [f]	age surgeon region gorgeous religious laugh	[eidʒ] ['səːdʒən] ['riːdʒən] ['gəːdʒəs] [ri'lidʒəs] [lɑːf]
j	[dʒ]	judge	[jʌdʒ]
n=ng ng	[ŋ] [ŋg]	ink finger	[iŋk] ['fiŋgə]
ph	[f]*	phlegm	[flem]
qu	[kw]	queen	[kwiːn]
sc ience ious	[ʃ* əns, əs]	conscience conscious	['kɔnʃəns] ['kɔnʃəs]
s ian sion ious sion sh s=z sti al an on	[ʃ* ən, ən, əs] [ʒən] [ʃ]* [z] [stʃ] əl, ən, ən	Russian passion dissensious vision she wise celestial Christian question	['rʌʃən] ['pæʃən] [di'senʃəs] ['viʒən] [ʃiː] [waiz] [si'lestʃəl] ['kristʃən] ['kwestʃən]
th th ti al an ence ent on ous ts	[θ] [ð] [ʃ* əl, ən, əns, ənt, ən, əs] [ts]	thing this partial gentian patience patient nation ambitious cats	[θiŋ] [ðis] ['pɑːʃəl] ['dʒenʃən] ['peiʃəns] ['peiʃənt] ['neiʃən] [əm'biʃəs] [kæts]

wh	[ʍ]	what	[ʍɔt]
x x	[ks] [gz]	box example	[bɔks] [iɡ'zɑːmpl]
y	[j]	yard	[jɑːd]

【注意】[1] 父音に於ても who の如きは Webster 式では符號を施す工風がなくて hōō のやうに書き直してゐる。この他にも同じやうな例がある。斯樣に書き直す時は Webster 式では sh を [ʃ] に zh を [ʒ] ににあてゝゐる。

【注意】[2] なほ、發音記號と Webster 式との共通な表音字は次の十五文字である。

b d f h k l m n p r s t v w z

(その三)

aː.....ä, â ai.....i, y au.....ow, ou æ.....ă ʌ.....ŏ, ŭ	m.....m n.....n ŋ.....n̲
e.....ē ei.....ā, ę ɛə.....âr, êr	p.....p b.....b t.....t
əː.....ēr, ēar, īr, ûr, ȳr, ə.....a̲, ę̲, o̲, u̲, ä̲, a̲r, ēr, o̲r, o̲ur, u̲r	d.....d k.....k, c g.....g
iː.....ē, ī i.....ĭ, ȳ, ɪ.....ä̆, ē̆, ȳ	ʍ.....wh w.....w, wh f.....f, ph v.....v θ.....th ð.....th
ou.....ō, ow	r.....r l.....l j.....y h.....h

o……ö,	s……s, ç
ɔː……ą̣, ô	z……ʂ, z
ɔ……ą̣, ō	ʃ……sh, çh
	ʒ……zh
uː……ǫ, ŏŏ, ṵ	tʃ……ch, tch
u……ǫ, ŏŏ, ṵ	dʒ……dh, j, g

(三) 日本語の發音記號表

	ア	イ	ウ	エ	オ
(ア)	a*	i	U*	e	o
カ	ka	ki	kU	ke	ko
サ	sa	ʃi*	sU	se	so
タ	ta	tʃi*	tsU	te	to
ナ	na	ni	nU	ne	no
ハ	ha	çi*	FU*	he	ho
マ	ma	mi	mU	me	mo
ヤ	ja*	i	jU	e	jo
ラ	Ra*	Ri	RU	Re	ro
ワ	wa	i	U	e	o
ガ	{ga* {ŋa*	gi ŋi	gU ŋU	ge ŋe	go ŋo
ザ	za	ʒi*	zU	ze	zo
ダ	da	dʒi*	dzU	de	do
バ	ba	bi	bU	be	bo

バ	pa	pi	pU	pe	po
キャ	kja*		kjU		kjo
シャ	ʃa*		ʃU		ʃo
チャ	tʃa*		tʃU		tʃo
ニャ	ɲa*		ɲU		ɲo
ヒャ	ça*		çU		ço
ミャ	mja*		mjU		mjo
リャ	Rja*		RjU		Rjo
ギャ	{gja* {ŋja		gjU ŋjU		gjo ŋjo
ジャ	ʒa*		ʒU		ʒo
ヂャ	dʒa*		dʒU		dʒo
ビャ	bja*		bjU		bjo
ピャ	pja*		pjU		pjo

【注意】[1] 以上のうち * を附したものはローマ字の場合とちがふものであるから特に注意を要する。U と R は、假に我國のそれらの音の記號にしたもの。

【注意】[2] クッは [kwa] でグッは [gwa] 又は [ŋwa] で示す。

【注意】[3] 「ン」はセンベイ(煎餅)では [m] を、センタウ(錢湯)では [n] を、センキン(千金)では [ŋ] を示すがその外に、

ア	ン	(餡)	[ã]
イ	ン	(印)	[ĩ]
ウ	ン	(運)	[ũ]
エ	ン	(縁)	[ẽ]
オ	ン	(恩)	[õ]

の如く、その前の母音の鼻音化を示す時もある。但し「ン」を [m] (例、アンマ [amma]) [n] (例、アンナイ [annai]) 又は [ŋ] (例、アンガイ [aŋŋai]) を示す爲にも使ふことは勿論である。

索　引

A

[ai] 72
[ai] の綴字法 72
[aiə] 73
[aiə] の綴字法 73
[au] 74
[au] の綴字法 74
[auə] 74
[ɑ:] 69
[ɑ:] の綴字法 70
[æ] 67
[æ] の綴字法 69
[æ] と [ɛ] 68
[ʌ] 81
[ʌ] の綴字法 82

B

[b] 5
[b] の綴字法 8
母音 vowel 49
母音の總括 92
鼻(腔)音 nasal sound 12, 49

C

長 long 106
調子 pitch 115
中硬口蓋 middle of the hard palate 17
中舌面 middle of the tongue 17
中舌(中顎)音の總括 44
[ç] 43
[ç] [j] の總括 44

D

[d] 15
[d] 音の綴字法 16
濁音 sonant 7
出 off-glide 2
同化 assimilation 97
[dʒ] の綴字法 43

E

[e] 63
[e] の綴字法 64
[é] 63
會厭 epiglottis 6
[ei] 61
[ei] の綴字法 61
[ɛə] 65
[ɛə] の綴字法 67
[ə] 90
[ə:] 90
[ə:] の綴字法 92

F

フ 22
[f] 22
[f] の綴字法 23
[f] [v] の總括 23
父音 consonant 49
父音分類表 51
final-s の疑問 105
複音節 polysyllable 109

G

[g] 18
[g] の綴字法 18
顎角 angle of jaws 53
僞聲門 false glottis 6
僞聲帶 false vocal chords.. 6
girl [gəəl, giəl, *or* gɛəl] 92
合口音 rounded sound 61

H

[h] 48
半 half-long 106
半濁音 8, 50
破裂音 explosive sound 9, 49
破裂音の性質 102
破裂音の特殊な性質 103
ヒの發音 44
平調 level intonation 115

I

[i] 57
[i] の綴字法 58
[iː] 55
[iː] の綴字法 56
[ɪ] 58
[ɪ] の綴字法 58
[iə] 57
[iə] の綴字法 57
いき breath 7
入 on-glide 2

J

[j] 43
[j] の綴字法 44
弱母音 unaccented *or* unstressed vowel 58
弱勢 53, 110
弱勢の語 weak word 111
(上)齒(下)唇音の總括 23

K

[k] 18
[k] の綴字法 18
開口音 unrounded sound 61
環狀軟骨 ring cartilage 5
懸壅垂 ubula 9
[k] [g] [ŋ] の總括 20
氣管 windpipe 5
氣管支 bronchus 5
氣息の段落 breath-group ... 113
廣母音 wide *or* lax vowel ... 61
後母音 back vowel 54
降調 falling intonation 115

こゑ voice 7
口腔 mouth cavity 12
口(腔)音 oral sound 12
口蓋 palate 17
口角 corners of the mouth .. 54
甲狀軟骨 shield cartilage ... 5
硬口蓋 hard palate 17
後硬口蓋 back of the hard palate 17
後軟口蓋 back of the soft palate 17
口音 oral sound 49
こり tension; narrowness ... 57
喉頭 larynx 5
喉頭音 48
後舌面 back of the tongue .. 17
後舌音の總括 46
狹母音 narrow or tense vowel 61
强調 emphasis 111
强勢 stress; accent 53, 110

L

[l] 37
[l] の綴字法 38
[l̩] 38
[l] [l̩] の總括 38

M

[m] 9
[m] の綴字法 12
[m] 9
[m] [m̩] の總括 12
摩擦音 fricative sound 23
盲孔部 blindes Loch (獨) ... 17
モルガニー竇 Morganic pockets 6
無聲音 voiceless sound 8
無聲音の母音 48

N

[n] 15
[n] の綴字法 16
[n̩] 15
[n] [n̩] の總括 15
中 2
軟口蓋 soft palate 9
二重母音 diphthong 61
[ŋ] 19
[ŋ] の綴字法 19
[ŋ̊] 19

O

[o] 86
音幅 sonority 108
音の長短 quantity of sound 106
央音 central sound 49
音節 syllable 109
[ou] 83
[ou] の綴字法 84
[ɔ] 76
[ɔ] の綴字法 76
[ɔː] 77
[ɔː] の綴字法 78
[ɔə] 79

[ɔə] の綴字法 79
[ɔi] 79

P

[p] 2
[p]の綴字法 3
[p] [b] [m] の總括 12
[p] と [b] との差異 7

R

連音といふこと 96
連續音 continuant 9
"r-linking" 36
[r] 33
[r] の綴字法 35
[ʀ] 33
[r] と [ʀ] 34
[ɹ] 34
[ɽ] 35
[r] [ɽ] の總括 35
(兩唇)後舌音の總括 46
(兩)唇音 2
(兩)唇音の總括 12

S

[s] 31
[s] の綴字法 31
參考書 116
耳語 whisper 7
擦音 sibilant 49
聲門 glottis 6
聲門の開閉の樣 6
清音 surd 7
清音の母音 48
清音と濁音 50
聲帶 vocal chords 6
シ 40
齒(背)舌(端)音の總括 25
齒間舌端音 25
唇音 2
唇音の總括 12
齒唇音の總括 23
舌 tongue 17
昇調 rising intonation 115
側音 lateral sound 49
側音の總括 38
[s] [z] の總括 31
[ʃ] 40
[ʃ] の綴字法 41
[ʃ]=[tʃ] 41
[ʃ] [ʒ] の總括 40

T

[t] 13
[t] の綴字法 15
短 short 106
單音節 monosyllable 109
[t] [d] [n] の總括 15
轉寫 transcription 94
轉寫の注意 94
[tʃ] の綴字法 41
[θ] 25
[θ] の綴字法 26
[θs] か [ðz] か 28
[θ] [ð] の總括 25

[ð] 25
[ð] の綴字法 26

U

[u] 89
[u] の綴字法 86
[uː] 87
[uː] の綴字法 87
[uə] 88
[uə] の綴字法 88
[uː] と [juː] との區別 88
[uə] と [juə] との區別 88

V

[v] 22
[v] の綴字法 23

W

[w] 46
[w] の綴字法 47
[ʍ] 46
[ʍ] の綴字法 46
[ʍ] [w] の總括 46

Y

your [jɔə] 88
抑揚 intonation 115
有聲音 voiced sound 8

Z

[z] 31
[z] の綴字法 32
前母音 front vowel 54
前硬口蓋 front of the hard palate 17
前軟口蓋 front of the soft palate 17
前舌面 front of the tongue 17
舌背(軟口蓋)音の總括 20
舌緣音の總括 40
(舌齦)側音の總括 38
舌端 point of the tongue 17
舌端(上齦)音 13
舌端(上齦)音の總括 15
舌端(後齦)音の總括 35
舌端(前齦)音の總括 31
[ʒ] 40
[ʒ] 音の綴字法 41
[ʒ]=[dʒ] 43

同じ著者によりて

日本語學一斑 . . . . . (明治義會)

應用言語學十回講話 . . . . . (成美堂)

外國語最新教授法 . . . . . (大日本圖書株式會社)

發音學講話 . . . . . (三省堂)

英語發音學大綱 . . . . . (三省堂)

英語教育 . . . . . (博文館)

英語發音練習カード . . . . . (研究社)

おもかげ . . . . . (研究社)

あはゝのアンナ . . . . . (研究社)

英語小發音學

大正十一年[illegible]月廿二日 印刷　大正十一年[illegible]月廿五日 發行

著者　岡倉由三郎

發行兼印刷者　小酒井五一郎
東京市麹町區富士見町六丁目七番地

印刷所　研究社印刷所
東京市牛込區神樂町一丁目二番地

發行所　研究社
東京市麹町區富士見町六丁目七番地
電話九段一五七〇・三八二二番
振替口座東京二八六〇一番

(定價金壹圓貳拾錢)

323
421

終